

外務省

國際聯盟支那調查委員會報告書
ニ對スル帝國政府意見書

昭和七年十一月二十一日

一九三一年十二月十日ノ國際聯盟理事會決議ニ依リ
任命セラレタル調査委員會報告書ニ對スル意見書

目 次

緒論	一頁
第一章 支那	五
第二章 滿洲	一七
第三章 九月十八日ノ事件及其ノ後ノ軍事行動	三一
第四章 新國家	三九
第五章 結論	五七

緒論

日本政府ハ國際聯盟ニ依リ任命セラレタル調査委員會ノ提出セル報告書ニ對シ、該文書ノ重要性
ニ鑑ミ、極メテ慎重ナル檢討ヲ加ヘタリ。

日本政府ハ終始調査委員會ニ對シテ各般ノ情報ヲ供給シ其ノ調査ヲ容易ナラシムルコトニ全力ヲ
注キタル次第ナルカ、調査委員等カ異常ニシテ新規ナル多數ノ問題ヲ包含スル機微且複雜ナル事

態ニ付テ其ノ詳細ヲ知悉センカ爲傾倒セル努力ヲ衷心ヨリ多トスルモノナリ。

只委員會ノ任務タル極メテ困難ニシテ、而モ與ヘラレタル時日ノ甚タ短カリシニ鑑ミ、報告書中
隨所ニ脱漏、矛盾及誤解ヲ認ムルハ蓋シ已ムヲ得サル所ナルヘシ。事態ニ對スル十分ナル智識ヲ
獲得スルニハ一ヶ年ト雖モ長シトセス、然ルニ一行ハ満洲ニ僅カ六週間ヲ、又北平及南京ノ雰圍
氣中ニ數週間ヲ過シタルニ止マルヲ以テ、勢ヒ委員ニ比シ支那語及支那ノ實狀ニ通曉セル人々ノ
供給スル情報乃至其ノ抱懷スル見解ニ倚頼スルノ外ナク、從テ其ノ受ケタル印象ハ頗ル皮相ナル
ヲ免レス。委員カ今少シク長時日ヲ有シ且支那ノ他ノ部分特ニ南支ヲモ訪問シタランニハ、支那
ノ事態ニ關シ其ノ表示セル樂觀ハ著シク變更セラレタルナルヘシ。

日本政府ハ報告書中其ノ不當ナリト認ムル凡テノ點ヲ指摘セントスルモノニ非ス、又末節ノ事項
ニ關シ把羅剔扶セムトスルモノニモ非ス。報告書ハ全體トシテハ殊ニ其ノ敍述的部分ニ於テ事件
ノ提要トシテ其ノ價値ヲ認ムルヲ得ヘシ。固ヨリ是等ノ點ニ付テモ後日改メテ意見ヲ提出スルノ

権利ハ放棄スルモノニ非サルモ、茲ニハ差當リ事實ノ真相ヲ明カニスル目的ヲ以テ最モ重要ナル事項ニ關シ若干ノ意見ヲ提示スルニ止メントス。

日本政府ハ是等意見ヲ提出スルニ當リ、委員會カ誠心誠意ヲ以テ報告書ヲ作成セルコトニ對シ敢テ疑念ヲ挾マムトスルモノニ非サルハ勿論ナルモ、同時ニ例ヘハ日本政府提出ニ係ル資料等ノ如キ出所確實ナル各種ノ情報カ看過又ハ無視セラレ、之ニ反シ出所不明ノ疑ハシキ情報ニ對シ不當ノ信用與ヘラレタルノ嫌アルコトヲ痛感スルモノナリ。

委員會カ兩當事國間ニ正式ニ交換セラレタル書類ノ外、新聞記事、偶々入手セル私信竝ニ委員自身及其ノ専門委員等カ何等特別ノ資格ヲ有セサル個人ト爲シタル私的談話等ニ其ノ斷定ノ基礎ヲ置キタルノ事實ハ報告書面ニモ明カニシテ、右ハ日本政府ノ默過シ得サル所ナリ。而シテ此ノ種出所ノ不明且不確實ナル資料カ常ニ日本ノ主張ニ對スル支那ノ主張ヲ支持スル爲ニ利用セラレ居ルコトハ注意ニ値ス。日本政府ハ各個ノ場合ニ付斯ル資料ノ出所ヲ確メテ之ヲ反駁スルノ方法ナカリシヲ以テ、是等ノ資料ニ對シ如何ナル程度ノ信用カ與ヘラルヘキヤヲ明カニスル爲更ニ調査ヲ爲スノ權利ヲ留保セサルヲ得ス。

此ノ種ノ疑ハシキ又ハ價値ナキ證據ヲ認容セルコトハ九月十八日事件及滿洲國成立ニ關スル部分ニ於テ特ニ顯著ナリ。其ノ結果ハ前者ノ場合ニ於テハ日本軍行動ノ動機ニ對スル完全ナル誤解トナリ、後者ノ場合ニ於テハ滿洲將來ノ統治ニ關シ報告書ノ他ノ部分ノ趣旨トモ一致セス又現實ノ事態トモ一致セサル提案トナレリ。

十八日事件
及新國
件
事
般

事態全般
考
慮セ
ラ
ス
ヘ
カ

今後極東平和確保ノ方法ヲ討究スルニ當リ、國際聯盟トシテハ支那及滿洲ニ於ケル實情全般ニ付、報告書ノ作成後ニ起レル事件ヲモ併セ考慮スルニ力メサルヘカラス。日本政府カ本意見書ヲ作成セルハ、聯盟ノ右努力ニ對シ及フ限りノ援助ヲ供シ、聯盟各國ヲシテ現實ノ事態ヲ凡ユル關係ニ於テ明瞭ニ理解セシメンカ爲ニ外ナラス。

本意見書中自カラ支那人ノ行爲ニ對シ批難ヲ加ヘタル節アルモ、報告書中ニ間々潛在スルカ如キ日本ハ支那國民ニ對シ反感又ハ敵意ヲ有ストノ觀念ハ之ヲ否定セサルヘカラス。日本政府ハ支那國民カ甚シク誤レル指導ト恐怖政治トノ犠牲トナリ、且外部ニ對シ多大ノ誤解ヲ與ヘ居ルモ、彼等ノ欲スル所ハ平和及靜穩ノ裡ニ其ノ勤勞ノ成果ヲ享受セムトスルニ外ナラサルコトヲ信スルモノナリ。日本ハ年來ノ友誼的態度ヲ維持シ、日支兩國民間ニ協力ヲ遂ケ、以テ繁榮且善隣ノ實ヲ舉クルノ時期ノ到來スルヲ俟ツモノナリ。

譯
收
分
ナ

第一章 支 那

イ、一般的的考察

報告書カ滿洲ニ於ケル事態ヲ検討スルニ先チ、第一章ニ於テ支那ノ一般的の状況ヲ述ヘ、其ノ國內ノ現状ヲ描寫セント努メタルハ極メテ事宜ニ適スル所ナリ。

不幸ニシテ報告書ハ、委員會ノ爲セル調査カ啻ニ不完全ナルノミナラス、皮相的ナルコトヲ暴露セリ。蓋シ報告書中ニモ主トシテ實際ノ見聞ニ基ク正當ナル判断ノ妙ナカラサルハ事實ナルモ、是等折角ノ見聞及判斷モ樂觀ノ雑ニ包マレ、爲ニ這般ノ事情ニ通セサルモノヲ眩惑シ真相ヲ謬ラシムルノ憾アリ。

委員會ハ「支那ハ組織アル國家ニ非ス」（一七頁）「支那ハ完全ナル混沌且意想外ノ無政府狀態ニ在リ」（一七頁）ト云フカ如キ敍述ヲ意外トスルモノノ如シ。即チ委員會ハ、華府會議當時北京及廣東ニ完全ニ分離セル二個ノ政府存立シ、匪賊跳梁シテ屢々内地ノ交通ヲ妨害シ、而シテ數ヶ月後中央政府ヲ顛覆シ、滿洲ニ第三ノ獨立政府ヲ樹立セシムニ至レル内亂ノ氣運醸釀シツツアリシコトヲ述ヘ、要スルニ支那ニ於テ「若干ノ省又ハ其ノ一部カ事實上自治狀態ニ在リタルハ勿論、少クトモ獨立ヲ主張セル三個ノ政府存在セル」ニ拘ラス、華府會議參加國ハ支那ニ對シ前記ノ敍述トハ全ク異ナリタル態度ヲ執リタル旨ヲ指摘シ居レリ（一七頁）。

華府會議當時ノ事態ハ決シテ満足ナルモノニハ非サリシモ、當時ニ於テハ僅ニ三個ノ主要勢力ノ

對抗ヲ見タルノミ。然ルニ今日ニ於テハ支那ハ全ク支離滅裂ノ状態ニ在リ。外蒙古及西藏ハ殆ト完全ニ離脱シ、南京国民政府ハ各地方ノ權力者殊ニ廣東ニ於ケル南方派ノ服從ヲ贏チ得サルノミナラス、現ニ湖北、福建及江西ノ諸省ニ中心ヲ有スル共匪ノ大集團ノ脅威ヲ受ケ居ル状況ナリ。是等權力者ノ多クハ何レモ自ラ首長トナリ支那ヲ統一セムコトヲ夢想シ居ルヤモ知レサルモ、此ノ故ヲ以テ報告書ノ動モスレハ斷定セムトスルカ如ク支那ヲ以テ統一セリト爲スコトヲ得ス。

華府會議當時ニ於テハ支那カ速カニ統一及平和ヲ恢復スヘシトノ希望ヲ懷クコト不可能ニハ非サリシモ、其ノ後ノ情勢ハ右希望ヲ裏切レリ。其ノ不統一及無政府狀態ハ益々惡化ノ度ヲ加ヘタリ。諸將領ノ鬭争ハ支那ノ政治機構中ニ織リ込マレ、共產主義ハ國土ノ中樞ニ深ク喰入り、内爭ノ習慣ハ全般ニ浸潤シ風土病化スルニ至レリ。華府會議當時ニ比シ事態カ改善セリト爲スハ、道理ニ眼ヲ閉チムトスル樂觀主義カ、然ラスンハ現地ノ状況ヲ認識シ得サリシニ基クモノト謂フヘキノミ。

實例　日本政府ハ報告書第一章所述ノ支那ノ現狀ニ關スル判断中正當ニシテ有力ナルモノ尠ナカラサルヲ認ム。

即チ報告書ハ第一三頁ニ於テ「政治的擾亂、内亂、社會的及經濟的不安定並ニ其ノ結果タル中央政府ノ萎微ハ一九一一年ノ革命以來支那ノ特徴ト爲リタリ。是等ノ状態ハ支那ト接觸シ來レル一切ノ國家ニ不利ナル影響ヲ及ボシ來レルモノニシテ、匡救セラルニ至ル迄ハ常ニ世界平和ニ對スル脅威タルヘタ、又世界經濟不況ヲ助成スル一原因タルヘシ」トナシ、

第一四頁ニ於テ、日支兩國カ當面シタル外國文明ノ同化及之ニ基ク國內改革ニ關スル諸問題ヲ論シ、支那ノ「領土ノ廣大ナルコト、支那國民ニ國家的統一ノ缺如セルコト、及徵收セラレタル收入ノ全部カ中央國庫ニ到達セサル傳統的財政組織」ニ基ク支那ノ特殊ノ状態ヲ強調シ、「支那ノ外國人ヲ受入ルルコトニ對スル嫌惡及支那在住外國人ニ對スル支那ノ態度ハ當然重大ナル結果ヲ生ムヘキモノナリシ」コト、及「右ハ其ノ爲政者ノ注意ヲ外國人ノ勢力ニ對スル反抗及其ノ制限ニ集中セシメタル」コトヲ記載シ、「其ノ結果トシテ支那ヲシテ新シキ諸狀態ニ善處シ得シムル爲ニ必要ナル建設的改革ハ殆ト全ク顧ラレサリシ」コトヲ附記シ、

第一六頁ニ於テ、一九一四年乃至二八年「支那ハ各軍閥間ノ戰爭ニ依リ荒廢セラレ、當時ニ存在スル匪賊ハ零落セル農夫、飢餓ニ襲ハレタル諸地方ノ絶望セル住民及給料不渡リノ兵士等ヲ編入シテ真正ノ軍隊ト擇フ所ナキニ至レリ。南方ニ於テ戰ヒツアリシ立憲主義ノ人士サヘモ幾度トナク彼等自身ノ中ニ發生スル軍閥間ノ確執ノ危險ニ曝サレタル」事實ヲ回想シ、

第一六一一七頁ニ於テ、「外見上統一ハ暫時保留セラレタリ。然レトモ有力ナル軍閥カ相互ニ連合シ南京ニ向ヒ進軍セル場合ニハ統一ノ外觀スラモ保持スルコト不可能ナリキ。是等軍閥ハ未タ曾爲ニ戰フコト必要ナリシ」旨ヲ記載シ、

最後ニ第一七頁ニ於テ「外見上統一ハ暫時保留セラレタリ。然レトモ有力ナル軍閥カ相互ニ連合シ南京ニ向ヒ進軍セル場合ニハ統一ノ外觀スラモ保持スルコト不可能ナリキ。是等軍閥ハ未タ曾

テ目的ヲ達セサリシモ彼等ハ戰敗ノ後ニ於テモ輕視シ得サル潛勢力タリキ。加フルニ彼等ハ決シテ中央政府ニ對スル戰爭ハ叛逆行爲ナリトノ解釋ヲ採ラサリキ。彼等ノ眼ヨリ見レハ是等ノ戰争ハ單ニ彼等ノ黨派ト偶々國都ニ在住シ諸外國ニ依リ中央政府トシテ承認セラレタル他ノ黨派トノ間ノ爭霸戰ニ過キサリキ」ト述へ、「右概括的敍述ヨリ見ルニ支那ノ崩壞的諸勢力ハ今猶優勢ナルモノノ如シ」トノ結論ニ達シ居レリ（一七頁）。

以上ノ敍述ハ全然正當ナルカ、右敍述ハ同一章ニ表示セラレタル樂觀的見解、例へハ第一七頁ノ「現在ニ於テハ中央政府ノ權威ハ尙若干ノ省ニ於テ薄弱ナリト雖モ中央ノ權力ハ少クトモ公然トハ否認セラルルコトナシ」トノ斷定ト如何ニシテ之ヲ調和シ得ヘキヤ。

諸將領間ノ戰鬪カ容易ニ終熄スルニ至ラサルハ報告書作成後ノ最近ノ事實ニ徵スルモ明瞭ニシテ、北方ニ於テハ國民政府ノ命令ニモ拘ラス劉珍年及韓復榘ハ九月中旬以來敵對行爲ヲ繼續シ居リ、南方ニ於テハ例へハ福建省政府主席ノ椅子ヲ廻ツテ相反スル軍閥及黨派ノ間ニ抗爭勃發セリ。西方ニ於テハ西藏軍隊ハ西康及青海ヲ占領シ、又四川省ニ於テハ劉文輝、劉湘ノ間ニ軍事行動起リツツアリ。蔣介石將軍カ是等諸將ニ對シ斯ル行爲ハ統一缺如ノ印象ヲ外間ニ與フヘシトテ急電ヲ發シ、切ニ其ノ注意ヲ喚起セルニモ拘ラス敵對行爲ハ依然續行セラレタリ。

報告書ハ又支那ニ於ケル共產主義ハ單ニ「ソヴィエト」聯邦以外ノ多數ノ國ニ於ケルカ如ク現存ノ政黨員ニ依リテ支持セラルル政治上ノ主義ニモ非ス、又他ノ政黨ト權力ヲ爭フ特別ノ黨組織ニモ非ス、「支那ニ於ケル共產主義ハ國民政府ニ對スル現實ノ爭霸者トナレリ、支那共產主義ハ其レ自

體ノ法律、軍隊及政府並ニ領土ニモ比スヘキ其ノ行動地域ヲ有ス。是等ノ事態ニ關シテハ他ノ如何ナル國ニ於テモ其ノ類ヲ見サル」コト（二三頁）ヲ明白ニ記述シ居レリ。

以上所謂「崩壞力」ニ付概説スル所アリタルカ、右崩壞力カ絶エス支那ヲ支配シツツアルコトハ報告書モ正ニ認メ居レリ。之ニ依リテ見ルモ公平ナル檢討ノ結果ハ、華府會議以來「事實ニ於テ相當ノ進歩カ遂ケラレタリ」トスル報告書第一七頁ノ意見トハ反對ニ、支那ノ狀態カ事實上更ニ一層惡化シ居ル事ヲ明示スルモノナルコト、日本政府ノ信シテ疑ハサル所ナリ。

ロ、支那ニ於ケル排外運動

這般ノ不幸ナル日支間ノ衝突ヲ誘發セルカ如キ雰圍氣ノ釀成上前記ノ無政府及混亂狀態ニ勝ルトモ劣ラサル役割ヲ演シタルハ、支那ニ於ケル排外思想ノ幾多強烈ナル表現ナリトス。

報告書モ亦左ノ如ク斷定シ居レリ。

支那ハ、華府會議ニ於テ爲サレタル通、其ノ困難ヲ解決スル爲ノ國際的協調ノ道程ニ上リタルヲ以テ、若シ右道程ニ從ヒ進ミタルニ於テハ、爾後ノ十年間にニ於テ更ニ顯著ナル進歩ヲ遂ケ得タルナルヘシ。然ルニ支那ハ其ノ毒々シキ排外宣傳ノ遂行ニヨリ妨害セラレタリ。右宣傳ハ特ニ二方面ニ於テ執拗ニ實行セラレ、其ノ結果現在ノ紛爭ヲ惹起セル雰圍氣ノ釀成ヲ誘導セリ。

即チ經濟的「ボイコット」ノ利用及諸學校ニ對スル排外宣傳ノ注入之ナリ（一八頁）。

如斯事態惡化ニ與ツテ力アリタルハ排外宣傳（特ニ學校ニ於ケル）及「ボイコット」ナルカ、不辛ニシテ報告書ハ兩者ヲ分離シテ取扱ヒ居レリ。最近ニ於ケル支那ノ實情ヲ了解シ、特ニ日支間

ノ緊張ヲ招來シ遂ニ一九三一年九月十八日ノ事件ヲ誘發シタル特殊ノ原因ヲ了解センカ爲ニハ、右兩者ヲ相關聯シテ考察スルコトニ特ニ意ヲ用ヒサルヘカラス。

學校ニ於ケル宣傳
國民政府ハ強キ排外感情ニ充タサレ、青少年ノ腦裡ニ激烈シキ外國人憎惡ノ念ヲ吹込ムコトニ之努メ來レリ。五千萬ノ支那青年カ激烈ナル思想ノ影響ノ下ニ成長シツツアルノ事實ハ、近キ將來ニ對スル寒心スヘキ問題ナリ。而シテ南京政府ハ此ノ警戒スヘキ道程ノ促進ニ腐心シツツアルモノナリ。

報告書ニ曰ク

孫逸仙博士ノ思想ハ恰モ從來古典ノ有シタル權威ヲ持ツカ如キモノトシテ今ヤ諸學校ニ於テ教授セラレ、孫總理ノ遺訓ハ革命前ニ於テ孔子ノ教訓カ受ケタルト同様ノ尊敬ヲ受ケツツアリ。然レトモ不幸ニシテ青少年ノ教育ニ當リ、注意ハ國民主義ノ建設的方面ニ對スルヨリモ寧ロ否定的方面ニ注カレタリ。諸學校ノ教科書ヲ熟讀スル者ハ、其ノ著者カ愛國心ヲ燃スニ憎惡ノ焰ヲ以テシ、男性的精神ノ養成ヲ被害ノ意識ノ上ニ置クコトニ努メタリトノ印象ヲ得。此ノ結果トシテ、學校ニ於テ植付ケラレ且社會生活ノ凡ラユル方面ヲ通シテ實行セラレタル毒々シキ排外宣傳ハ學生ヲ驅リテ政治運動ニ參加セシムルコト爲リ、時ニハ國務大臣其ノ他ノ官憲ノ身體、居宅又ハ官署ノ襲擊乃至政府ノ顛覆ヲ計ルカ如キ事態ニ至ラシメタリ（一九頁）。

「ボイコット」
報告書ハ支那ノ「ボイコット」カ支那ノ日本ニ對スル敵意ノ明確ナル表現ニシテ同時ニ日本ノ經濟的利益ニ對スル侵害ナルコト、從テ「ボイコット」カ心理的並ニ物質的ニ日支間ノ友好關係ニ

害アルコトヲ認メ居レル處、是等ノ見解ハ日本政府カ終始一貫主張シ來レル所ヲ確認スルモノナリ。

然レトモ支那ノ「ボイコット」ノ特質及「ボイコット」ニ對スル責任問題ニ關シ左ニ若干說述セムト欲ス。

近年ニ於テハ支那ノ「ボイコット」ハ特殊ノ性質ヲ帶ヒ來リ、單ニ外國カ其ノ在支居留民ノ生命財產保護ノ爲執レル合法的措置ニ對スル抗議ノ手段トシテノミナラス、外國ヲシテ其ノ條約上ノ權利ヲ拋棄セシムトスル國策遂行ノ手段トシテモ使用セラルルニ至レリ。

「ボイコット」ニ對スル政府ノ責任問題ニ付テハ、報告書ハ國民黨ニ其ノ責任アルコトニ關シテ任對スル責
ハ「何等ノ疑點ナシ」ト述ヘ居レリ。右ハ正ニ肯綮ニ當レルカ、一方國民黨カ西洋ノ語義ニ於ケル單ナル政黨ニハ非スシテ、支那約法ニ基ク正規ノ國家機關ナルコトヲ閑却スヘカラス。從テ國民黨ノ行爲ニ對シテハ國民政府ニ於テ責任ヲ負フヘキモノナルコト明カナリ。

革命外交
排外教育及「ボイコット」運動ノ實行ヲ別々ニ敍述スルノミニテハ、如何ニ精細ニ瓦ルモ支那ノ現狀ヲ充分ニ了解セシムルニ足ラス。宜ク問題ノ全局ヲ相關的ニ敍述シテ、右等排外的活動ノ根底ニハ國民黨及國民政府ノ排外政策ノ存在スルコトヲ明カナラシムルヲ要ス。然ルニ報告書ハ此ノ關係ヲ明カニシ居ラス。茲ニ注目スヘキハ、華府會議後數年ニシテ、國民黨及國民政府カ支那ニ於テ重要ナル役割ヲ演スルニ至リタル事實ナルカ、彼等ハ權力ヲ掌握シテ以來所謂「革命政策」ナルモノヲ執拗ニ遂行シ來レル次第ニシテ、右政策ハ支那ニ於ケル無法律狀態ト相俟ツテ甚タシ

ク外國ヲ警戒セシメ、諸權利ノ還付ヲ益々躊躇ゼンメタルカ、現在ニ於テハ是等諸權利ハ支那ニ於ケル外國人ノ生命財產ニ對スル唯一ノ保障タルニ至レリ。

ル色彩ヲ支那ノ國民主義ニ注入シ來リ、・・・、國民主義ハ租借地、鐵道地域内ニ於テ外國ノ手ニ依リ行使セラルル行政的及其次ノ他ノ純粹ニ商業的ナラサル諸權利、租界ニ於ケル行政權、並ニ外國人カ支那ノ法律、法廷及課稅ニ服從セサルコトヲ意味スル治外法權等ノ返還ヲ要求ス（一八頁）ト述ヘ、又「支那ハ例外的權力及特權ハ其ノ國民的榮譽及主權ヲ侵害スルモノナリト感スルカ故ニ是等ノ特權ヲ直ニ還付スルコトヲ要求ス」（二三頁）ト述ヘ居レリ。

委員會ニシテ更ニ研究テ進ハフランニハ 在ノ單ナル【要求】ニ止テシテ 支那官憲が一方的
宣言及暴力ニ依リテ飽迄モ實現セシメント決意シ居タルコトヲ明カニシタルナルヘシ。

蒋介石ハ國民革命成功ノ曉ニハ支那ノ一切ノ「不平等」條約ヲ即時且一方的ニ廢棄スヘキ旨ヲ宣言セリ。一九二七年一月漢口及九江ノ英國租界ハ國民黨ニ依リ強力ヲ以テ奪回セラレタリ。同年四月南京政府成立後國民黨ノ行動ハ或ハ稍緩和セラレタルモノアリタルヘキモ、其ノ政策ハ依然トシテ變化ナク、「不平等」條約ノ廢棄及外國ノ權益排除ノ意圖ヲ反覆宣言シ、又一般民衆ニ對シ右政策ノ實行ヲ再三誓約セリ。而シテ右誓約ニ基キ國民政府ハ一九二九年十二月二十八日附ニテ

一九三〇年一月一日ヨリ治外法權ヲ廢棄スヘキ旨規定セル法律ヲ公布シ、更ニ一九三一年一月ニ及ヒ同年二月末日迄ニ治外法權問題ノ満足ナル解決ニ到達シ得サルニ於テハ、外交手段以外ノ方法ニ依リ治外法權撤廃ノ既定政策ヲ遂行スヘキ旨宣言シ、同時ニ「在華外國人管理條例」ヲ發布シ、斯クシテ一方的ニ條約ヲ廢棄スルノ意圖ヲ公然表明シ、右事實ヲ關係列國ニ通報セリ。

依之觀之在支外國人ノ生命及權利カ九月十八日事件前重大ナル危險ニ面シ居タルコト明白ナルヘタ、而シテ「日本ハ支那ノ最モ近接セル隣國ニシテ且最大顧客ナルヲ以テ本章ニ於テ記述セラレタル無法律狀態ニ依リ他ノ何レノ國ヨリモ損害ヲ受ケタル（二三頁）コトハ報告書ニモ記述セラレタル通ナリ。

支那二於ケル外國人ノ變則的ナル地位

外國ノ執
レル變則
的ナル自
衛方法

支那問題ノ根底ニ横ハレル同國ノ内部的不統一、其ノ結果外國人ノ生命財産カ不斷ニ曝露セラレ
居ル不安狀態、學校ニ於ケル排外心ノ注入及青年ニ對スル排外宣傳、外國人ニ對スル徹底セル

「ボイコット」手段、條約ノ一方的廢棄其ノ他「革命外交」ノ原理ニ由來スル凡ユル手段ハ、相俟ツテ鞏固ナル統一政府無キ支那ニ發生スル各種問題ニ對シ全然特殊ナル性質ヲ與ヘ、通例ノ處理方法ノ適用ヲ不可能ナラシム。

而シテ斯クノ如キ排外的特徴ハ世界ノ何處ニモ類例無キ所ニシテ、其ノ結果列國ヲシテ自力ニ依リ其ノ權益ヲ保護スルノ制度ヲ維持スルノ餘儀無キニ至ラシメタリ。即チ列國ハ支那ニ於テ治外法權ヲ有シ、又租借地ノ外天津、漢口、上海其ノ他ノ都市ニ於テ租界ヲ維持シ、自ラ警察及行政ヲ

施行シ居レリ。斯クシテ支那ノ無法律狀態ヨリ生スル惡影響ヲ妨止スル爲必要ナル措置ヲ講シ居ル一方、列國ハ又武力ニ依リ其ノ權利ヲ保護スルノ已ムナキ實情ニ在リ。現ニ滿洲ニ於ケル日本鐵道守備隊ノ外、平津地方ニハ一九〇一年以來日英米佛伊各國軍隊駐屯シ、其ノ兵數ハ九月十八日事件直前ニ於テ日本軍約九百、其ノ他約四千七百ヲ算セリ。是等軍隊ハ凡テ條約ノ規定ニ基キ駐屯シ居ルモノナリ。是等列國ノ多クハ又條約ニ基カス單ニ自衛ノ必要上上海ニモ軍隊ヲ駐屯セシメ居レルカ、右ハ一九二二年華府會議後新ニ發生セル事態ニシテ、同會議以後事態ノ更ニ悪化セルコトヲ示スモノナリ。加之列國ハ上海及青島ノ如キ海港ノミナラス、揚子江及白河ノ如キ内水上ニモ多數ノ軍艦ヲ配置シ居レリ。

而モ右ハ單ナル裝飾ニ非シテ是等軍隊及艦船ハ屢々現實ノ自衛ノ爲ニ使用セラレタリ。

一九二五年ノ沙面ニ於ケル外國軍隊ノ發砲事件、一九二六年ノ萬縣砲擊事件、及一九二七年ノ南京砲擊事件ノ如キ著例ノ外ニ、揚子江航行中ノ外國軍艦カ沿岸ノ支那軍ヨリ擅ニ發砲セラレ之ニ反擊スルノ已ムヲ得サリシ幾多ノ事例アリ。而シテ右支那軍ノ攻擊ハ近年就中國民黨ノ權力掌握以來殊ニ增加シ來レリ。

斯ノ如ク支那ニ於ケル列國ノ地位ハ全ク例外的ノモノニシテ、世界ノ何レノ部分ニモ類例ナキモノナルコト明白ナルヘシ。從テ國際慣例及自衛權行使ノ態様ハ支那ニ於テハ他ノ文明國ニ於テ見サルカ如キ特質ヲ有ス。現ニ報告書自ラモ第二三頁ニ於テ「支那ノ國民的要望ノ實現ハ内政ノ分野ニ於テ近代的政府ノ機能ヲ發揮スル能力ノ如何ニ繫ルモノナリ。而シテ此等兩者ノ齟齬カ除去セ

實例

代支那機能政府近ハ
執行部告書
示スコトヲサ

支那ノ結果
ハ通常常
能スルコト適用
能スルノハ通常常
支那ニ於テハ通常常

ラレサル限り國際的軋轢及事件ノ發生ノ危險、「ボイコット」並ニ武力干渉ハ繼續セラルヘシ」ト述ヘ居レリ。

國際裁判又ハ仲裁裁判ニ訴フル等所謂「平和機關」ヲ適用スルカ如キハ支那ノ場合ニ於テハ到底困難ニシテ、假令死活的利益ニ關セサル紛議ニ付テモ是等機關ヲ利用スルコトノ不可能ナリシコト既ニ過去ニ於テ經驗セラレタル所ナリ。支那ノ變則ナル狀態及列國カ右狀態ノ存在ニ鑑ミ前記ノ變則且特異ナル制度ノ變更ヲ肯セサルノ事實ハ、通常ノ「平和機關」ヲ現在ノ組織ノ儘ニテハ支那ニ關スル紛爭ニ適用スルノ不可能ナルコトヲ證明シテ餘アリ。

然ニハ且洲ハ自
然ノハ支那ノ完全ナル一部ニナ

第二章 满洲

イ、一般的の考察

委員會ハ滿洲カ自然且必然ニ支那ノ一部ナリトノ推定ニ左右セラレ居ルモノノ如ク、現ニ報告書第二九頁ニ於テ滿洲ハ常ニ「支那ノ完全ナル一部」ト看做サレ居タルコトヲ述ヘ居レリ。實際上滿洲ノ支那トノ結合ハ單ニ一時的且偶然ノコトニシテ、右ハ報告書ニ付テ見ルモ明カルカ、報告書ハ不幸ニシテ清朝ノ退位後ノ事態ニ付極メテ輕ク觸レ居ルニ過キス。滿洲官憲ハ「袁世凱ノ統率ニ從ヒ」タルヤモ知レス、又國家組織法上ノ自己ノ地位ニ關シ餘リ考慮ヲ拂ハサリシヤモ知レサルモ、實際ノ事實トシテハ、支那ヨリ滿洲朝廷カ消滅シタル結果、右帝室ニ依リ、滿洲ヲ同君聯合ノ關係ニ於テ支那ニ結ヒ付ケ居タル連繫ノ基礎消滅シ、而モ「何等新ナル連繫様式ノ之ニ伴フモノナカリキ」ト述ヘタル南京政府顧問「エスカラ」氏ノ達見（「支那ト國際法」二四〇頁）ヲ採用スルコト無難ナリ。「エスカラ」氏ハ「滿洲ハ未タ曾テ支那ノ屬領タリシコトナシ、蓋シ支那國ハ却テ滿洲ノ一族ニ依リ征服セラレタレハナリ。然レトモ又支那ヲ以テ滿洲ノ屬領ナリシトモ云フヲ得ス、、、本件ハ實ニ「同君聯合」ノ一例タルモノナリ」と説明シタル後、「元來滿洲ニ對スル支那ノ權利ナルモノハ殆ト問題ニナリ得サリキ、單ニ滿洲人カ帝位ニ在リタリト云フコト以外何モノモナカリシナリ。此ノ帝室消滅シタルヲ以テ更ニ滿洲ヲ支那ニ結ヒ附ケムカ爲ニハ、一ノ新ナル法律樣式ヲ發見セサルヘカラサルコトトナリタリ。而モ右樣式ハ特ニ探索セラレ

タルコトナカリシカ如シ」ト述へ居レリ。要スルニ滿洲ト支那トノ連繫ハ薄弱且曖昧ナルモノニシテ、張作霖モ種々ノ機會ニ於テ右連繫ヲ明白ニ否認セリ。

帝政廢止以後　敍上ノ如キ曖昧ナル事態ニ拘ラス、假ニ百歩ヲ譲リ滿洲ヲ以テ一時支那ト正式ニ合體シ居リタリト推定スルモ、一九一六年袁世凱ノ死後ニ於ケル統一共和國ノ沒落ハ、支那ニ於ケル總チノ政治的統一ノ崩壊ヲ顯示スルモノナリ。其ノ廣大ナル地域ニ於テ生シタル何レノ政府モ其ノ他ノ政府ニ對シテハ何等ノ霸權ヲ有セサリシ實情ニシテ、結局南京ニ於テ一ノ政府カ設立セラレ且列國ニ依リ正當政府トシテ承認セラレタリト雖モ、右ノ事實ニ依リ同政府ハ滿洲ノ如キ曾テ其ノ實權下ニ服シタルコト無カリシ地方ニ對シ權力ヲ及ホシタルコトハナラス。

事實張作霖ハ北京ニ於テ政權ヲ把握セル各派ニ對シ、自己ニ都合良キ場合ニ限り其ノ意圖ヲ迎ヘムトシタルコトアリトスルモ、未タ曾テ彼等ヨリ命令ヲ受ケタルコト無シ。報告書モ亦「彼ノ態度ハ變轉常ナキ中央ノ支配者タル軍閥トノ個人的關係ノ如何ニ依リ變化セリ。彼ハ自己ト政府トノ關係ヲ視ルニ個人的同盟ノ意味ヲ以テシタルモノノ如シ」ト述へ居レリ(二八頁)。然ルニ報告書ハ張作霖獨立ノ幾多ノ事例ヲ舉ケツツモ、一方張カ支那政府ヨリ獨立シ又ハ之トノ任意的同盟ヲナシタルハ決シテ支那ヨリ獨立セントノ意圖ヲ抱キ居リタルモノニ非ストノ理論ヲ展開シ居ル處(二八一一九頁)、右ハ高々張カ其ノ支配スル滿洲ヲモ包含スル支那ノ統一ヲ驕望シタルヘキコトヲ意味スルニ過キス。何レニスルモ滿洲ノ地位カ之ニ依リ何等影響セラルモノニ非サルコト明カナリ。蓋シ滿洲ノ地位如何ハ事實ニ基クヘキモノニシテ推定ニ基クヘキモノニ非サルナリ。

現ニ張ハ一九二二年五月ノ宣言ニ於テ東北諸省ハ「支那共和國ノ領土ト認メス」ト明白ニ述へ居レリ。(註)

(註) 在北京外國公使、在天津外國領事及在唐山外國文武在留者宛。

予ハ徐世昌ヨリ東三省、熱河及察哈爾ノ特別區域並ニ内外蒙古ヲ放棄スル旨ノ通知ヲ接受セリ。是等ノ地方ハ總チ之ヲ支那共和國ノ領土ト認メス。

予ハ予ノ特殊ナル地位ニ鑑ミ是等地域ニ關スル一切ノ責ナ貢ヒ、且極力友好國民ノ生命財產ヲ保護シ、彼等トノ友好關係ノ增進ヲ圖ラサルヲ得ス。清朝及支那共和國時代ニ締結セラレタル一切ノ重要ナル條約ハ完全ニ承認且尊重セラルヘシ。外國公使、外國領事及在留外國人ニシテ爾餘ノ問題及事項ニ付交渉セント欲スルモノハ綏州ニ於ケル予ノ政廳ニ申出ツルコトヲ得ヘシ。予ハ人民ノ福祉及繁榮増進ノ爲、今後友好國民トノ通商關係ヲ從來ヨリモ一層親密ナラシムヘシ。徐世昌カ本月一日以後東三省、内外蒙古並ニ熱河及察哈爾ニ關シテ締結スル如何ナル條約モ予ノ直接ノ許可ナキモノハ予ニ於テ之ヲ承認セス、且予ハ右ヲ以テ徐世昌ガ黙意ヲ以テ爲シタルモノト看做スヘシ。

奉天軍總司令　張　作　霖

張作霖ノ後繼者タル張學良モ實質上同一ノ態度ヲ採レリ。即チ彼ハ滿洲ヲモ含ム支那統一ノ理想ハ之ヲ斥ケス、右理想ノ象徴トシテノ南京政府ヲモ容認セルモ、實際ニ於テハ之ニ服從スルコトヲ全然拒否セリ。報告書モ「軍事、政務、財政、外交等總チノ問題ニ付中央政府トノ關係ハ滿洲側ノ自發的協力ヲ必要トセリ。無條件服從ヲ要求スルカ如キ命令又ハ訓令ハ容認セラレサリシナルヘシ。滿洲官憲ノ意ニ反シタル任免ノ如キハ想像シ得ラレサリキ」ト述へ居レリ(三〇頁)。斯ノ如ク報告書ハ張家ノ下ニ於ケル滿洲カ如何ナル支那政府ニモ全然服從セス且其ノ干渉ヨリ全ク獨立セルコトヲ明示シ居レリ。

故ニ報告書カ第二九頁ニ於テ満洲ハ「支那ノ完全ナル一部タリシナリ」ト述ヘ、又他ノ部分ニ於テ今日ニ於テモ亦同様ナリト斷定シ居ルハ、報告書カ満洲ノ完全ナル獨立ヲ證スル爲引用シ來レル凡テノ他ノ記述ト撞着スルモノナリ。報告書ノ見解ハ日本ニ不利ニ國際法ヲ援用スルモノニシテ、國家ハ一個ノ至高ナル政府ヲ有シ且繼續的ニ之ヲ有セサルヘカラストノ最モ基本的ナル國際法ノ原則ニ背馳シ居レリ。事實一九一六年以來支那ノ全部ニ對シ實際ニ權力ヲ行使シタル政府存シタルコトナシ。

尙報告書ハ満洲カ支那人ノ一部ト看做サルヘキコトヲ更ニ證セントシテ、満洲ニ於ケル現住民ノ多數乃至ハ大部分カ支那人移民タリトノ疑モ無キ事實ヲ舉ケ居ル處、之ニ對シテハ、報告書自ラモ述ヘ居ル如ク支那人ニハ深キ國家意識無キコト及報告書ノ此ノ論法ヲ世界ノ他ノ地方ニ適用スルトキハ多數國家ノ領土的地位及世界平和ニ對シ頗ル困惑スヘキ結果ヲ齎スヘキコトヲ附言スルヲ以テ足ル。

口、張家ノ秕政

東三省及後ノ東北四省カ獨立ノ狀態ニ在リタルコト竝ニ一九二八年十二月以後ニ於テ是等各省ノ行政的統一ノ保持セラレタルコトハ、満洲ノ施政カ善良ナリシコトヲ意味スルモノニ非ス。委員會モ張家ノ秕政ニ關シ幾分寛容ニ失スルノ嫌ハアルモ左ノ如ク記述シ居レリ（三一頁）。

満洲當局ハ從來ノ如ク其ノ權力カ南京ヨリ來ルヨリモ遙ニ多ク彼等ノ軍隊ヨリ來ルモノナルコトヲ認識セリ。

右事實ハ約二十五萬ニ上ル大常備軍維持セラレ、又二億弗（銀）以上ヲ費シタリト傳ヘラル大兵工廠ノ保持セラレ居ルコトヲ説明スルモノナリ。軍事費ハ全經費ノ八〇「バーセント」ニ達シタリト推計セラレ、其ノ殘額ヲ以テシテハ行政、警察、司法及教育ノ費用ヲ支辨スルニ足ラス、又國庫ハ官吏ニ對シ適當ナル俸給ヲ支給スル能ハサリキ。而シテ凡ユル權力ハ少數軍人ノ手ニ歸シタルヲ以テ、官職ハ彼等ノ手ヲ通シテノミ得ラレ、斯ル事態ノ避ケ難キ結果トシテ、親族閥、腐敗、惡政ハ跡ヲ斷タサリキ。本委員會ハ右惡政ニ對スル甚大ノ不平カ廣ク各地ニ存スルヲ認メタリ。尤モ右事態ハ満洲ニ特有ノモノニハ非スシテ、支那ノ其ノ他ノ地方ニモ同様乃至更ニ悪化セル狀態存在セリ。

軍隊給養ノ爲ニハ重稅ヲ課スルノ要アリタルカ、通常收入ニテハ猶不足セルヲ以テ、當局ハ省政府不換紙幣ノ價值ヲ順次下落セシムルコトニ依リ更ニ人民ニ課稅セリ。右政策ハ既ニ一九三〇年頃殆ト獨占的ト爲リ居タル「豆類公買」ニ關聯シテ屢々行ハレ、殊ニ最近其ノ度ヲ加ヘタリ。満洲重要物產ノ管理權ヲ取得スルコトニ依リ、當局ハ外國ノ豆類買入業者就中日本人ニ對シ高價買入ヲ強ヒ、以テ其ノ收入ヲ增大セント欲シタルカ、斯ル取引ハ當局カ如何ナル程度ニ銀行及商業ヲ管理シタルヤラ示スモノナリ。官吏モ亦自由ニ凡ユル私的企業ニ從事シ、其ノ權力ヲ利用シテ自己及其ノ一味ノ爲ニ富ヲ蒐メタリ。

絞上ノ陰慘ナル描寫ハ日本參與員ヨリ委員會ニ提出セル「支那ノ現狀」第八章ノ材料ヲ甚シク切詰メ編述セルモノニシテ、右描寫ノ示ス所ヨリモ更ニ深刻ナリシ實情ヲ充分ニ表示シ居ラス（特

ニ司法、行政及警察ニ關シ然リ。然レトモ前掲ノ抜萃ハ、其ノ措置穩和ナルニモ拘ラス猶且如何ニ満洲人カ官憲及軍閥ノ壓制的桎梏ノ下ニ呻吟シタルカ、從テ彼等ヲ驅テ機會タニアラハ其ノ桎梏ヲ脱セムトスルノ舉ニ出テシムルニハ日本側ノ人爲的刺激ヲ必要トセリトノ推論ノ如何ニ當ラサリシカラ示スニ足ルモノナリ。

ハ、日本ノ特殊地位

日本カ「特殊地位」ヲ獲得セルハ實ニ此ノ地域ナリ。

滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」ニ付テハ多分ニ神祕的ナル觀念ノ附隨スルカ如ク見ルモノアルモ、實際ハ頗ル簡單ナルモノニシテ、同地方ニ於ケル日本ノ條約上ノ特殊諸權利ノ總和ニ、其ノ隣接狀態及地理的地位竝ニ歴史的交渉ヨリ生スル自然ノ結果ヲ加ヘタルモノニ外ナラス。日本ノ孰ルヲ得ヘキ自衛手段ハ其ノ權益ノ程度ニ準セサルヘカラサル處、右權益ハ特殊、緊密ニシテ且重大ナリ。自衛權行使ノ標準的實例タル「カロライン」號事件ノ際、英國カ米國ノ領土ニ侵入シ目前ノ脅威ヲ排除セル行動ヲ米國ニ於テ容認シタル所以ノモノハ、加奈陀ト米國トノ接壤關係竝ニ加奈陀ノ英國ニ對スル極度ノ重要性及當時ニ於ケル同地方混亂狀態ニ外ナラサリキ。

凡ソ自衛行動カ正當ナリヤ否ヤハ擁護セラルヘキ權益ノ重要性、危害ノ急迫及該自衛行為ノ必要性ニ依リ決定セラルモノナリ。日本ノ滿洲ニ於ケル權益ハ絶對的ニシテ、且日本ノ領土ハ之ト境ヲ接シ而モ日本ハ同地方ノ軍隊ノミニ依倚スルコトヲ得ス。日本ノ「特殊地位」ハ一見シテ明白ナリ。右ハ滿洲ノ行政ニ對シ概括的ニ且溢リニ干涉スルノ權ヲ日本ニ與フルモノニ非ス、又敢

テ斯ル主張ヲ爲サムトスルモノニモ非ス。然レトモ右ハ軍事的攻擊ヲ受ケタル場合異常ナル力ヲ以テ自己ヲ防禦セサルヲ得サル地位ヲ正ニ日本ニ對シ賦與スルモノナリ。

日本政府ハ一九〇五年及一九一五年ノ條約ニ依リ日本カ滿洲ニ於テ獲得セル諸權利ヲ列舉セル委員會ノ記述ニ對シ全然同意スルモノニシテ、委員會カ是等ノ條約カ今猶完全ニ有效ニシテ一方的行爲ヲ以テ廢棄シ得サルモノナルコトヲ認メ居ルハ滿足トスル所ナリ。

委員會ハ報告書第三八頁ニ於テ

「上記滿洲ニ於テ日本ノ有スル數多ノ權利ノ概說ニ依リ、滿洲ニ於ケル日支兩國間ノ政治、經濟及法律關係ノ特殊性ハ明瞭ニシテ、斯ノ如キ事態ハ恐ラク世界ノ何處ニモ其ノ例ナカルヘク、又隣邦ノ領土内ニ斯ノ如キ廣汎ナル經濟上及行政上ノ特權ヲ有スル國ハ他ニ比類ヲ見サルヘシ」ト爲シ、

又第三九頁ニ於テ

「滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ、其ノ性質及程度ニ於テ諸外國ノ夫レト異ルモノアリ。一九〇四年乃至五年奉天及遼陽、南滿洲鐵道沿線、鴨綠江及遼東半島等滿洲ノ野ニ於テ戰ハレタル日本ノ露西亞ニ對スル大戰爭ノ記憶ハ、總テノ日本人ノ腦裡ニ深ク印セラル所ナリ。日本人ニトリテハ對露戰爭ハ露西亞ノ侵略ノ脅威ニ對スル自衛ノ爲生死ヲ賭シタル戰トシテ永久ニ記憶セラルヘク、右ノ一戰ニ十萬ノ將士ヲ失ヒ且二十億圓ノ國帑ヲ消費シタル事實ハ日本人ヲシテ是等ノ犠牲ヲ決シテ無益ニ終ハラシメサランコトヲ決意セシメタリ」ト述ヘ居レリ。

此ノ「特殊地位」ハ報告書ノ主張スルカ如ク支那ノ主權ニ抵觸スルモノニ非ス。

南滿洲鐵道附屬地トシテ知ラル極メテ狹隘ナル地域ニ於テ露國ニ許セラレ、次ア日本ニヨリ
繼承セラレタル權力ハ、支那ノ主權ト毫モ抵觸スルコトナシ。支那カ此ノ地帶ヲ露國ニ對シ割讓
又ハ長期租貸シ又ハ露國ヲ通シテ日本ニ對シ同様ノ措置ニ出テタリトスルモ、支那ノ主權ニ抵觸
セサルコトニ於テハ何等變リナシ。右ハ主權ノ行使ニシテ何等主權ト抵觸セス。露國トノ協定成
立ノ際支那ノ主權ハ單ニ名義上存續ヲ許サレタルニ過キサルカ、右ノ事實ハ支那カ露國ニ與ヘタ
ル權利ト支那ノ主權トノ抵觸ヲ來スモノニ非ス、寧ロ反對ニ是等ノ權利ハ支那ノ主權ニ由來スル
モノナリ。

又滿洲ノ日本ニ對スル近接關係並ニ經濟上及戰略上ノ重要性カ該地方ニ於ケル主權ト抵觸スルモ
ノナリトハ想像スルコトスラ不可能ナリ。固ヨリ是等ノ事實ハ、假ニ滿洲カ他ノ遠隔ナル地ニ在リ
タル場合ニ比シ、日本ヲシテ滿洲ニ事アル際已ムヲ得ス自衛行爲ニ出ツルノ可能性ヲ大ナラシム
ルモノナリ。然レトモ右ハ何等同地方ノ主權ヲ制限スルモノニ非ス。斯ノ如キ自衛權行使ハ極メ
テ稀ニ發生スルモノナルモ如何ナル國家、假令最强ノ國家ト雖モ之ヲ免ルルヲ得サルモノナリ。
現ニ米國ノ主權ハ「カロライン」號事件ニ依リ侵害セラレタルコトナカリシナリ。

日本ノ「特殊地位」ハ執拗ニ攻擊セラレ居ルモ、日本ハ之ニ依リ幾多ノ困難ニモ拘ラス滿洲ニ於
テ文化的ノ大事業ヲ成就セリ。此ノ發展ニ主トシテ寄與シタルハ南滿洲鐵道ノ多面的活動ナル
カ、報告書ハ第二章ニ於テモ亦第八章ニ於テモ何等右實績ヲ認ムル所ナク、支那移民ノ活動ヲ重

日本ノ文
化的功績

視シナカラ、一方同鐵道ニ關シテハ殆ト言及シ居ラス。滿洲ノ今日ノ繁榮カ勤勉且質素ナル支那人ノ流入ニ負フ所尠カラサルハ報告書ノ云ヘル如クナルモ、之ヲ以テ支那政府ノ移民政策ニ歸スルコトヲ得ス。右支那移民流入ノ現象ハ實ニ彼等ニ對スル滿洲ノ魅力ニ依ルモノニ外ナラス。而シテ滿洲カ魅力アルモノタリシハ、同地方ノ施政善良ナリシカ爲ニハ非スシテ、日本ノ存在ニ依リ戰爭ノ苦惱ヨリ解放セラレ居リシカ爲ナリ。支那人ハ人モ知ル如ク、又報告書中ニモ指摘セラル如ク、環境ニ對スル適應性ニ富ミ、且強キ國家的感情ヲ有セス、右支那移民ノ支那ニ對スル連繫ハ若シアリトスルモ社會的及家族的感情ノ問題ニシテ、何等政治的連繫ヲ意味スルモノニ非ス。報告書ノ記述スル如ク（一二五頁）「滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ連鎖ハ、主トシテ民族的及社會的ナリ」。即チ右ノ連鎖ハ政治的ノモノニ非スシテ「經濟的ヨリモ寧ロ民族的及社會的」ノモノナリ（一二三頁）。此ノ點ヨリ見ルニ報告書カ右非政治的、非經濟的連鎖ノ政治的效果ヲ強調シ居ルハ了解ニ苦シム所ナリ。

ニ、日本ノ特殊地位ニ對スル侵害

報告書ハ滿洲ニ於ケル日本ノ企業及施設ニ關シ述フル所甚タ尠キモ、支那側ノ直接侵害ノ目的トナリシハ實ニ是等企業及施設ニ外ナラス。而シテ報告書ノ第三章ニ於テハ是等侵害ノ特定ノ問題ニ付檢討スル所アリ。即チ

一、南滿洲鐵道ニ對スル包圍政策

二、土地商租及其他ノ條約上ノ權利ノ行使ニ對シ加ヘラレタル妨害

日本ノ特
殊地位ニ
對スル侵

三、日本臣民就中朝鮮人ニ對シ加ヘラレタル壓迫

四、中村大尉ノ殺害

等ナリ。

ル輕視シ書中
點對スル

是等侵害
八月十日
事件關係

然ル處報告書ハ、第三章ニ於テモ又其ノ他ノ個所ニ於テモ、支那側ノ公然條約其他ノ約定ヲ侵犯シ且之ヲ廢棄セントスル政策ニ對シ誹議ヲ加ヘサルノミナラス、却テ國民黨ノ解放運動ニ藉口シテ之ヲ寛恕セントスルノ傾向スラアリ。又報告書ハ支那側ノ敵對的態度ノ爲懸案ヲ満足ニ解決シ得サルコトニモ觸レ居ラス。報告書カ是等ノ問題ヲ斷片的ニ取扱ヒ、此處ニ於テモ亦之ヲ一括シテ相關的ニ考察セサリシハ遺憾ナリ。若シ之ヲ相關的ニ考察シタランニハ、是等問題ノ根底ニハ一個ノ基礎的原因存シ、且是等問題ハ個々ノ場合ノ正邪ノ詮議立ハ暫ク措キ、要スルニ滿洲ニ於ケル日本ノ權益ヲ破壊セントスル決意ノ表現ニ外ナラサリシコトヲ明カニシ得タリシナルヘシ。

右ハ報告書中ニ於ケル張學良ノ南京政府トノ同盟後、滿洲ニ於テ發展セル事態ノ概説（三〇一三

一頁）ニ依リ一層明カナルヘシ。

外交政策ノ範圍ニ於テハ地方官憲ハ依然多大ノ行動ノ自由ヲ有シタルニ相違ナキモ、滿洲ト國民政府トノ合體ハ相當重要ナル結果ヲ招來セリ。東支鐵道ノ滿洲ニ於ケル地位ニ對スル張作霖元帥ノ執拗ナル攻撃及日本ノ要求スル或種ノ權利ニ對スル無視ハ、滿洲ニ於テ既ニ國民黨トノ合體以前ヨリ「進取政策」ノ採用セラレ居タルコトヲ示スモノナルカ、國民黨トノ合體後ハ滿洲ハ巧ニ組織セラレ且系統的ナル同黨ノ宣傳ニ開放セラレタリ。同黨ハ其ノ正規印刷物ニ於テ又

同黨ト關係深キ多數ノ機關紙ニ於テ常ニ喪失主權ノ回復及不平等條約ノ廢棄ノ極メテ重要ナルコト並ニ帝國主義ノ邪惡ヲ強調スルコトヲ止メサリキ。支那領土ニ於ケル外國ノ利益、裁判所、警察、警備兵又ハ軍隊ノ實體カ明白ナル滿洲ニ於テ斯ル宣傳カ深キ印象ヲ與ヘタルハ必然ナリ。國民黨ノ宣傳ハ同黨ノ教科書ニ依リ學校ニ浸入シ又遼寧人民外交協會ノ如キ協會出現シテ、國民主義的感情ヲ鼓吹強調スルト共ニ抗日煽動ヲ實行シ、又支那人家主及地主ニ對シテハ日本人及朝鮮人タル賃借人ヘノ賃貸料ノ引上又ハ賃貸契約ノ更新拒絶ヲ強要シタリ。日本人ハ委員會ニ對シ多數ノ此ノ種事件ヲ訴ヘ來レリ。朝鮮人移民ハ組織的迫害ヲ蒙レリ。諸種ノ抗日的命令及訓令發セラレ輒轢ノ事例推積シ危險ナル緊張加レリ。一九三一年三月各省首都ニ國民黨省黨部設立セラレ、次テ其ノ他ノ都市及地方ニ支部ノ設立ヲ見タリ。黨ノ宣傳員ニシテ支那ヨリ北上シ來ル者ハ次第ニ其ノ數ヲ加ヘ日本側ハ抗日運動ノ日ニ激化スルヲ訴ヘタリ。一九三一年四月奉天ニ於テ人民外交協會主催ノ下ニ五日間ノ會議開催セラレ、滿洲各地ヨリノ代表者三百餘名之ニ參加シ滿洲ニ於ケル日本ノ地位一掃ノ可能性ニ付討議セラレタルカ、其ノ決議ノ中ニハ南滿洲鐵道回収ノ一項ヲ含メリ。當時蘇聯邦及其ノ市民モ亦右同様ノ傾向ニ惱マサレタルカ一方白露人ハ何等返還スヘキ主權又ハ例外的特權ヲ有セサルニ拘ラス屈辱虐待ヲ蒙レリ。

右概説ハ九月十八日ノ直前ニ存在シタル狀況ヲ相當程度ニ描寫シ居ルモ報告書ノ第二章ニノミ掲ケラレ、第四章ニ於テ九月十八日事件ヲ記述スルニ當リ之ト關聯セシメテ何等言及スル所ナキハ遺憾ナリ。

報告書ハ第四章ニ於テ此ノ重大問題ヲ取扱フニ當リ、之ト日本側權益ニ對スル支那側ノ連續セル侵害トノ關係ニ關シ何等ノ認識ヲ示サス。強烈ナル日貨排斥、日支諸條約ノ效力否認、日本側鐵道ニ對スル破壞的競爭、朝鮮人移民ニ對スル妨害、將又萬寶山事件ノ何レニモ言及シ居ラス、偶々中村大尉事件ニ觸レ居ルノミ。要スルニ九月十八日事件ハ其ノ全背景ヨリ切離サレ居レリ。

支那側ノ侵略的決意ニ關スル證據ハ一切無視セラレ、之ニ代フルニ日本國民カ「再ヒ積極政策ノ採用」ニ轉セムトシツ、アリタリト想像セシムルカ如キ雜多ノ理由羅列セラレタリ。

侵略的ナル隣邦ノ正規軍ニ依リ、一國ノ安全ヲ構成スルノ致命的中権ニ加ヘラレタル武力攻撃ヲ反擊シ得ルハ理ノ當然ニシテ、之カ説明トシテ態々日本ノ貿易不振ノ如キ理由ヲ援用スル要何レニ在リヤ。日本側ノ迅速且完全ナル反擊ト從來ノ支那側ノ證據歷然タル侵略的意圖トヲ分離シテ取扱ヒタル結果ハ、遂ニ鐵道攻擊ニ對スル當然ノ措置ノ説明トシテ前記支那國ノ侵略ノ事實ヲ擧ケシテ、却テ日本ニ於ケル内政上ノ不平ト云フカ如キコトヲ舉ケサルヘカラサル破目ニ陥レリ。委員會カ正ニ調査スヘカリシ問題ハ支那側カ何カ故ニ滿洲ニ於テ「積極政策」ヲ採用セシヤノ理由ナリシナリ。

緊張緩和
日本ノ努力
既ニ一九三一年六月十五日、日本政府ハ滿洲ニ於ケル支那官吏及巡警ノ行動ニ依リ重大ナル結果ヲ惹起スルノ虞レアルコトヲ指摘セリ。而シテ日本政府ハ貿易不振又ハ軍事上若ハ政治上ノ不満ノ爲何等「積極政策」ヲ開始スルノ必要ニ迫ラレタルカ如キコト毫モナク、寧ロ凡ユル方法ニ依リ形勢ノ緊張ヲ緩和セント努メタリシナリ。斯ル努力ニ拘ラス支那側ノ侵略的態度ハ依然トシテ改

マル所無カリキ。日本軍カ「北大營」ニ入りシトキ「看哪！營垣西邊的鐵道」ナル營兵煽動ノ「ビラ」ヲ營舍壁上ニ發見シタル事實スラアリ。九月十八日ノ爆破カ實ニ此ノ地點ニ於ケル是等ノ兵士ノ仕業ナリシコトハ怪シムニ足ラス。

滿洲ニ存在セル緊張狀態ヲ明カニシ得ルモノハ實ニ此ノ支那側ノ侵害的態度ニシテ、報告書中ニ仄メカサレタルカ如キ日本側ノ「積極政策」ノ復活ニ非ス。其ノ他奉天ニ於ケル張學良軍内ニ瀰漫セシ傲慢暴戾ノ幾多ノ實例ハ、四月二十四日委員會ニ交付セラレタル關東軍作成ノ「滿洲ニ於ケル日支衝突ノ警見」ト題スル冊子中ニ收メラレアルモ報告書ハ之ニ言及タモシ居ラス。斯ノ如ク當時ノ雰圍氣ハ極メテ引火シ易キ狀態ニ在リ、苟モ爆發セシムルノ虞アルカ如キ行爲ハ如何ニ些細ナルモノト雖モ絕對ニ之ヲ避クルコト必要ナリシコトハ、敍上事態ノ推移ヲ注視シ以テ報告書中ニモ詳述セラレタル支那側ノ攻擊的態度ノ益々熾烈ニ向ヒツツアリタルコトヲ了解スルモノニ取リテハ自カラ明カナルヘシ。

第三章 九月十八日ノ事件及其ノ後ノ軍事行動

明憲ノ說

日本軍事當局ハ委員會ニ對シ或ハ文書ニ依リ或ハ關東軍司令部員トノ會議ニ於テ本事件ニ關スル完全且詳細ナル資料ヲ供給セリ。日本政府ニ於テハ是等資料ハ正確ニシテ何等偽ラサルモノナルヲ信シ之ヲ全般的ニ支持セント欲スルモノナリ。報告書ハ右等資料ヲ「日本側ノ説明」ト題シ六節ニ亘リ摘記シ居ル處（六七一六九頁）、右摘要中ニハ多クノ重要ナル細目脱漏シ居ルヲ以テ理事國ニシテ更ニ情報ヲ得ント欲スルニ於テハ事件ノ主要關係者及日本政府ノ供給セル資料ヲ參照スヘキナリ。

警ヶヘキ
委員會ノ論斷

報告書ハ「支那側ノ説明」ヲモ摘記セル後若干ノ論斷ヲ爲シ居レルカ、右論斷タルヤ日支双方ノ説明ヨリ當然生スヘキ結論ト相距ルコト遠ク、且委員會自ラモ認メ居ルカ如ク何等ノ公的性質ヲ有セサル外部ノ情報ニヨリ著シク左右セラレタルノ感アルハ日本政府ノ一驚ヲ禁シ得サル所ナリ。

委員會ハ鐵道爆破ノ事實ハ認メタルカ（七一頁）其ノ損害輕微ニシテ之ノミヲ以テシテハ日本ノ軍事行動ヲ正當トスルニ充分ナラサリシ旨附言セリ。然レトモ此ノ點ニ關シ委員會ハ次ノ如キ二個ノ事實ノ存在ヲ認メナカラ之ヲ充分ニ考慮ニ入ルルコトヲ解レルモノナリ。即チ第一ニハ相對抗スル兩兵力ノ間ニ緊迫セル狀態ノ存シタル事實ニシテ、第二ニハ一國ノ軍隊カ他國ノ領域内又ハ之ニ近接シテ駐屯シ、而モ事件頻發シ何時カハ迅速ナル行動ヲ執ルノ必要アルヘキヲ思ハシム

ル場合、苟クモ組織アル軍隊トシテハ當然之ニ備フヘキ緊急作戦計畫ヲ有セサルヘカラサルハ極メテ明瞭ニシテ日本軍モ亦スル作戦計畫ヲ豫メ用意セルノ事實之ナリ。

報告書カ右第一點ノ急迫セル緊急狀態、即チ日支間ニ漸次昂マリツツアリタル一般的緊張狀態及相接觸スル兩軍間ノ局地的緊張狀態ヲ認ヌツツモ而モ之ヲ充分明白ナラシメサリシ次第ハ曩ニモ述ヘタル通ナリ。

日本軍ノ
計畫

第二點即チ日本軍カ「支那軍トノ間ニ於ケル敵對行爲起リ得ヘキコトヲ豫想シテ慎重準備セラレタル計畫」(七一頁)ヲ有シタリトノ點ニ關シテハ單ニ事實ヲ一瞥セムカ、他ノ如何ナル國、他ノ如何ナル軍隊モ恐ラク同様方針ニ出ツルノ外無カリシナルヘキコト自カラ明白ナルヘシ。

九月十八日以前滿洲ニ於ケル日本軍ハ飛行機其ノ他豐富ナル軍需品及貯藏彈藥ヲ備ヘ、一大兵工廠ヲ有セル極メテ優勢ナル軍隊ニ對スルニ遙ニ劣勢ナル兵力ヲ以テシタリ。從テ同軍トシテハ何等カノ事件發生スル場合又ハ支那側ノ攻撃アリタル場合、優勢ナル敵軍ニ依リ壓倒セラルコトヲ避ケンカ爲、迅速ナル行動ヲ執ルノ準備ヲナシ置クノ要アリシハ當然ナリ。日本軍カ斯ル事態ニ備フヘキ計畫ヲ有シタルハ固ヨリ其ノ所ニシテ、若シ之ヲ有セナリシトセハ重大ナル職務懈怠ト云フヘシ。同軍ハ凡ユル場合ヲ周密ニ研究シ頻繁ニ演習ヲ行ヒテ其ノ結果ハ右計畫ノ殆ト自働的ニ實施ヲナシ得ル狀態ニ在リタリ。尤モ特定ノ場合現地將卒ニ對シ臨機裁量ノ餘地ハ與ヘラレタルモ、攻擊ヲ受ケタル場合如何ニ對應スヘキカハ豫見セラレ且知悉セラレ居タリ。從テ支那軍ニ依ル鐵道爆破及最初ノ發砲アリタル後、此ノ計畫カ「迅速且正確ニ實施セラレタル」(七一頁)

ハ極メテ當然ナリ。

電報
所謂平和

報告書ハ日本軍カ最モ合法且必要ナル防衛手段トシテ右緊急計畫ヲ用意セルコトト、支那側カ何等「日本軍ニ攻撃ヲ加ヘ又ハ特ニ右ノ時及場所ニ於テ日本人ノ生命及財產ヲ危險ナラシムルカ如キ」(七一頁)計畫ヲ有セサリシコトヲ對照シ、其ノ證據トシテ張學良カ支那軍隊ニ對シ隱忍ヲ旨トシ兵力ニ訴フヘカラスト訓令セル九月六日附電報ナルモノヲ引用セリ。尤モ日本側ハ右電報ニ關シ何等ノ情報ヲ有セサルモ、假ニ右電報カ果シテ適當ニ發受通達セラレ且其ノ後ニ於テ張學良自身ニ依リテ取消又ハ變更セラレタルコトナシトスルモ、支那軍隊ノ不規律カ世界周知ノコトナルニ鑑ミ、右電報ノ故ヲ以テ支那側カ日本軍隊ヲ攻撃セサルコトノ保障トモ、又支那側カ九月十八日ノ攻撃ヲ爲ササリシトノ證據トモナルモノニ非ス。況シヤ當夜支那軍隊カ實際攻撃ヲ爲シ且引續キ武力抵抗ヲ爲シタルノ事實アルニ於テヲヤ。此ノ點ニ付テハ委員會ハ「支那軍ハ何等協同、セル又ハ命令ヲ受ケタル攻撃ヲ日本軍ニ對シ行ヒタルモノニ非ス」ト述ヘ、支那側カ攻撃セリトノ假定ヲ否定スルコトナク單ニ之ヲ「協同セル又ハ命令ヲ受ケタル」モノニ非スト云ヒテ右攻撃ト本事件トノ關係ヲ輕視スルニ努メ居レリ。即チ報告書ニ據ルモ此ノ攻撃ハ少クトモ上官ノ命令ニ基本サル支那兵ノ行爲ナルヘシト見ラルル次第ナリ。

何レニセヨ爆破カ行ハレ且支那兵卒カ攻撃ヲ爲シタルコトハ儼然タル事實ニシテ其ノ結果損害ノ程度等ヲ問題トスルノ違無ク、日本側ノ緊急計畫ハ自働的ニ實施セラルニ至レルモノナリ。

委員會ノ
表示セル
動計畫ノ自

衛手段ト認ムルコトヲ得ス」(七一頁)ト附言スルヲ以テ其ノ義務ナリト思惟セリ。

斯ル判断ハ全然受諾シ難キ所ニシテ、右ハ戦争拠棄ニ關スル「ブリアン、ケロッグ」條約加盟國ノ何レモ意外トスル所ナルヘシ。

一九二八年六月二十三日附「ケロッグ」國務長官ノ同文通牒中自衛權ニ關スル一節ハ左ノ如シ。
(一) 自衛權、不戰條約米國草案中ニハ何等自衛ノ權利ヲ制限シ若ハ毀損スルモノナシ該權利ハ

各主權國固有ノモノニシテ一切ノ條約中ニ默示的ニ包含セラルモノナリ各國民ハ如何ナル時ニ於テモ又條約ノ規定如何ニ拘ラス攻撃又ハ侵入ニ對シテ其ノ領土ヲ防衛スルノ自由ヲ有シ且右國民ノミカ自衛ノ爲戦争ニ訴フルヲ要スル情勢ニアリヤ否ヤヲ決定スルノ權能ヲ有ス

又同條約批准ニ際シ米國上院ノ採擇セル決議ハ左ノ如シ。

自衛權ノ行使ハ右權利ヲ行使スル一國ノ領土權ノ範圍外ニ及フコトヲ得ヘク又屢々及フモノナルコトハ十分ニ認メラル所ナリ

更ニ一九二八年五月十九日及七月十八日附「サー・オースラン・チーベンバレン」ノ在英米國外交代表者宛書翰ヲ引用スルニ左ノ如シ。

前者ニ於テハ次ノ如ク述ヘラル、

四、英國政府ハ合衆國案第一條ノ用語ヲ攻究シタルモ右文言ハ自衛上一國カ執ルノ已ムナキニ至レル行爲ヲ排斥スルモノトハ思考セス「ケロッグ」氏ハ前記ノ演説中ニ於テ自衛權ハ拠棄

シ得サルモノト認ムル旨ヲ明ニセラレタルニ依リ英國政府ハ本問題ニ關シ條文ニ追加ノ要ナシト思考スルニ至レリ

一〇、國家ノ政策ノ手段トシテノ戦争ノ拠棄ニ關スル第一條ノ文言ニ顧ミ本官ハ世界ノ特定地域ニ於テハ其ノ康寧及保全カ我國ノ平和及安全ニ對シ特殊且緊切ナル利害關係ヲ構成スルモノナルコトニ付閣下ノ注意ヲ喚起セントス英國政府ハ從來此等地域ニ對スル干涉ヲ容認シ得サルコトヲ明ニセント努力シ來レリ攻撃ニ對シ此等地域ヲ防護スルコトハ英帝國ニトリ自衛ハ手段ナリ新條約カ此ノ點ニ付英國政府ノ行動ノ自由ヲ阻害セストノ明確ナル諒解ノ下ニ同政府ハ之ヲ受諾スルモノナルコトヲ明ニシ置クノ必要アリ合衆國政府モ亦同種ノ利害ヲ有シ他國カ之ヲ無視スルヲ非友誼的行爲ト看做スヘキ旨宣言シタルコトアルニ依リ英國政府カ其ノ立場ヲ斯ク明ニスルハ即チ合衆國政府ノ意図ト見解ヲ表明スルモノト信ス

後者ニ於テハ次ノ如ク述ヘラル、

本官ハ「ケロッグ」氏カ四月二十八日其ノ演説中ニ於テ本件條約ハ何等自衛ノ權利ヲ制限シハ毀損セスト述ヘラレタル見解及各國家ハ自ラ自衛ノ爲戦争ニ訴フルヲ要スル情勢ニアリヤヲ決定スルノ權能ヲ有ストノ意見ニ全然贊同スルモノナリ

佛國政府モ亦一九二八年七月十四日附在佛米國大使宛回答ニ於テ同様左ノ如ク述ヘタリ。

新條約中ニハ如何ナル方法ニ於テモ自衛權ヲ制限シ若ハ危殆ナラシムヘキモノヲモ包含セス此ノ點ニ關シ各國民ハ常ニ攻擊若ハ侵略ニ對シ其ノ領土ヲ防禦シ得ルノ自由ヲ有シ各國民ノミ

カ自衛ノ爲戰爭ニ訴フルヲ要スル情況ニ在リヤ否ヤヲ判定シ得ルナリ。

獨國政府ハ一九二八年四月二十七日附在獨米國大使宛書翰ニ於テ本條約ハ「各國家ノ自衛ノ主權ニ觸ルモノニ非ス」トノ前提ノ下ニ出發スルモノナルコトヲ宣言シ居レリ。

是等往復書翰ヲ了悉セル日本政府モ亦駐日米國大使宛一九二八年五月二十六日附公文ニ於テ「合衆國提案ハ何等獨立國家ニ對シ自衛ノ權利ヲ拒否セス」ト強調スルヲ忘レサリキ。

斯ル明白ナル留保アル以上、自衛ノ行動ニ對シテ決定的意見ヲ下スノ權利ハ專ラ當該國ノ主權ノ認定ニ繫ルモノナリ。本件ニ關シ委員會ハ「本委員會ハ現地ニ在リタル將校カ自衛ノ爲行動シツツアリト思惟シタルナルヘシトノ想定ハ之ヲ排除セス」ト明白ニ判定シ居ル處、九月十八日の事件ニ付テハ現地ニ在リタル將校以外何人ト雖モ日本軍ノ執リタル行動カ自衛ノ措置ナリシヤ否ヤヲ判断スルノ資格ヲ有スルモノナカルヘシ。

自衛ノ性質ニ關シ茲ニ詳説スルノ必要ヲカルヘク、右ニ付テハ米國國務卿「ウエーブスター」氏ノ定義ヲ以テ最モ適當トスヘシ。蓋シ同卿ハ自衛權ノ正當ナル行使ハ「手段ノ選擇及熟考ノ時間ナキ緊急且壓倒的ナル必要アル」場合タルコトヲ要ストナシ居レル處、九月十八日事件ハ是等ノ條件ニ正確ニ適合セリ。當時ノ狀勢ハ絶大急迫ナル危險ニ對抗スルノ必要アリタリ。即チ優勢ナル兵力ニヨリ明白ナル攻擊ヲ受ケ若シ早キニ及ンテ之ヲ排除セスンハ日本軍ハ満洲ヨリ驅逐セラレタルナルヘシ。手段選擇ノ餘地無ク只反擊ノ一途アリタルノミ。固ヨリ熟考ニ時ヲ費スヲ許サス、攻擊ハ公然開始セラレタリ。問題ハ極メテ簡單ニシテ危險ニ曝サレタル利益ノ程度カ強力措

置ヲ必要トスルヤ否ヤヲ考慮スルノ要ナカリキ。蓋シ是等ノ利益ハ極東ニ於ケル日本ノ地位其ノ物ニ外ナラサリシヲ以テナリ。

支那側ノ抵抗ニ伴フ爾後ノ事件ニ付テモ日本ハ何等ノ責任ヲ問ハルヘキ理由ナシ。普通ノ場合自衛ノ措置ハ抵抗ヲ受ケス且關係國間ノ友誼的商議ニ依リ直ニ解決セラルモノナリ。然レトモ一度武力抵抗ニ遭遇スルニ於テハ自衛手段カ如何ナル程度ニ擴大スルヤハ固ヨリ之ヲ豫測スルニ由ナキナリ。

此ノ關係ニ於テ彼ノ「ナガアリノ」事件ヲ回想スルハ必シモ失當ニ非サルヘシ。該事件ニ於テハ衝突ヲ希望シ又ハ之ヲ豫期シタルモノナカリシハ現ニ關係國ノ一國カ之ヲ「不慮ノ出來事」ナリト謂ヘルニ徵スルモノ明カナリ。當時希臘ニ於ケル叛亂ヲ鎮壓スル爲土耳其ノ援助ニ赴キタル埃及艦隊ハ之ヲ妨ゲントセル英佛露ノ艦隊ニ遭遇シ、事態甚々緊張セルニ際シ遇然ノ發砲カ導火トナリテ終ニ衝突ヲ惹起スルニ至リ、其ノ結果ハ埃及ノ艦隊ト共ニ土耳其ノ希望ハ殲滅セラレ希臘ノ獨立ハ刻印セラレタリ。然レトモ右ハ單ナル自衛行爲即チ發砲ニ對スル應射ニ發足セルモノニシテ、自衛措置ヨリ來ル結果ヲ制限スルコトカ如何ニ不可能ナルカヲ示スモノナリ。

委員會ハ九月十八日滿鐵附屬地帶全域ニ亘リ同時ニ軍事行動ノ起リタルコトヲ指摘スルモ、當時斯ル同時的行動カ何故ニ必要ナリシカヲ閑却セリ。千百秆ニ亘ル鐵道沿線ニ駐屯スル一萬四百ノ軍隊ヲ率キテ、關内ニ於ケル張學良麾下ノ十一萬ヲ除クモ尙二十二萬ヲ數フル支那軍隊ニ對峙セル日本軍司令官トシテハ他ニ執ルヘキ手段ナカリシナリ。殊ニ奉天ニ於テハ定員ニ満タサル一個

聯隊及若干ノ鐵道守備兵總計千五百人ヨリ成ル日本軍カ、砲約四十門ヲ有スル一萬五千ノ支那兵ニ對峙シ居リ長春其ノ他ニ於テモ同様ノ状態ニ在リタリ。日本軍司令官ハ百萬ヲ超ユル在滿日本臣民保護ノ責任ヲ有シタルカ、既ニ一地點ニ於テ攻撃セラレ且明カニ他ノ地點ニ於テモ攻撃ヲ受クル處アリシニ際シ、右保護ヲ確保スル唯一ノ手段ハ鐵道ニ依ル輸送ノ便ヲ悉ク利用シ支那軍隊ノ行動ニ對シ機先ヲ制スルニアリタリ。

要スルニ九月十八日夜開始セラレタル軍事行動ハ、支那側攻撃ノ場合ニ備フルカ爲準備セラレタ

ル計畫ヲ實施シタルニ過キサルモノニシテ、現地ニ於ケル支那側兵力ノ非常ニ優勢ナルニ顧ミ日本軍司令官ハ常ニ右計畫ヲ急速且正確ニ實施スルヲ以テ右保護ノ任ヲ果ス爲ニ缺クヘカラサルモノト思考シ居リタリ。右行動ハ自衛以外ニ亘リシコトナク、日本政府ハ該行動カ必要ナリシヤ否ヤ又ハ妥當ナリシヤ否ヤニ付外間ノ論議ヲ許ス能ハス。

報告書ハ九月十八日以後ニ於ケル日本臣民ノ生命財産ノ保護ヲ有效ニ保障スル爲ノ軍事行動ニ付相當仔細ニ記述シ居レル處、日本政府ハ是等細目ノ點ニ付テモ意見ヲ述フルノ必要アルモノ多々アルヲ認ムルモ茲ニハ一々論議セサルヘシ。只何レノ場合ニ於テモ未タ曾テ自衛權ノ範圍ヲ逸脱シタルコトナキヲ確信スルモノナリ。

第四章 新國家

問題ノ重

報告書第六章ニ掲タル滿洲諸問題ハ最モ重要ナリ。何トナレハ委員會カ第九章ニ於テ爲シタル「滿洲ニ於ケル現政權ノ存置及承認モ亦均シク不満足ナルヘシ」トノ一般的判定ハ滿洲國ノ成立及新政府ニ對スル住民ノ態度ニ關シ第六章中ニ爲サレタル論斷ニ其ノ基礎ヲ置キ居ルヲ以テナリ。

右論斷ハ實證セラレタル事實ヲ殆ト參酌セスシテ爲サレタルヤニ見受ケラル。短期間ノ滯在ヲ以テシテ、成立後僅々數週間ノ新國家ニ於ケル事態ノ真相ヲ把握スルノ困難ナルハ勿論ニシテ、斯ル新國家カ建國早々ノ時代ニ於テ例へハ反動分子及不平分子ノ策動、過渡期ニ必然伴フ諸々ノ困難特ニ商業及農業ニ對スル打撃、特ニ滿洲國ノ場合ニ於テ殊ニ熾烈且惡辣ナル反對宣傳ノ如キ各種ノ障害ニ遭遇スルハ免レナル所ナリ。

然ルニ報告書カ日本政府ノ嚴肅ナル聲明ニ耳ヲ藉サス、且日本政府提供ノ詳細ナル文書ニ對シ殆ト價値ヲ認メサル一方、滿洲及張學良ノ根據地タル北平ニ於テ素性不明ノ人物ノ意見ニ傾聽シ且出所ノ曖昧又ハ不明ナル書信ニ信ヲ置キタルコトハ遺憾ナリ。

從テ日本政府ハ報告書第六章ニ掲タル滿洲國ノ成立、住民ノ意嚮並ニ新國家ノ組織及將來ニ關シ國際聯盟理事會ヲシテ更ニ正確ナル觀念ヲ得シムルヲ以テ其ノ特別ナル責務ト感スルモノナリ。

イ、満洲國ノ成立

第一ニ報告書ハ一九三一年九月以前ニハ満洲ノ獨立ニ關シ未タ曾テ聞ク所ナカリキト論斷シ居レ
リ（九七頁）。

然ルニ満洲カ地理的及歴史的ニ終始支那本部トハ分離セル一特別地域タリシコトハ既ニ明瞭ニ説
述セリ。満洲ハ清朝ノ帝室領ヲ形成シタルモノニシテ支那共和國又ハ其ノ官吏ハ之ヲ支那本部ニ
合併スルノ實力ヲ有シタルコトナシ。且満洲ノ獨立カ少クトモ二回ニ亘リ張作霖ニ依リ宣言セラ
レタルハ報告書モ自ラ之ヲ認メ居レリ。張作霖及其ノ子張學良ノ暴政ハ周知ノ事實ニシテ之亦報
告書ノ認ムル所ナリ。彼等ノ野心及貪婪ハ彼等ヲ驅ツテ満洲ヲ犠牲ニ供シテ高價且慘憺タル支那
侵入ヲ企テシメタリ。而シテ此ノ結果夙ニ所謂「保境安民」運動起リ「満洲人ノ爲ノ満洲」ナル
叫ヒヲ舉ケシムルニ至レルハ儼然タル事實ニシテ、斯ル運動ヨリ名實共ニ完全ナル獨立ニ至ルハ
眞ニ一步ニ過キサリキ。該運動ハ架空ノ事實ニ非スシテ其ノ指導者ハ何レモ周知ノ人物ナリ。即
チ張作霖時代ノ奉天省長王永江及張ノ參議于沖漢ニシテ共ニ張ノ暴舉ヲ諫止シテ容レラレス其ノ
職ヲ辭スルニ至レルモノナルカ、九月十八日事件後ニ於テ自治指導部ノ組織者トナレルモノハ實
ニ于冲漢其ノ人ナリ。即チ彼カ自治指導部ノ組織者トナレルハ日本側ノ誘引ニ屈服セルニ非スシ
テ單ニ曩ニ中止セル事實ヲ繼續セルニ過キス。斯ノ如キハ満洲獨立運動ノ代表的事例ナリ。

以上ノ次第ヲ強調セムカ爲張家時代ニ起レル他ノ獨立運動ヲ一々列舉スルノ要ナン。然ルニ報告
書カ満洲獨立ノ思想カ存在セサリシト明言シ居ルハ意外ニ感セサルヲ得ス。

張父子ノ秕政及誅求ハ教養アル支那人及満洲人ヲ驅ツテ夙ニ改革ノ必要ヲ考慮セシメタリ。奉天
律師公會長趙欣伯ハ張作霖ニ本問題ヲ提議シタルモ其ノ容ルル所トナラサリキ。奉天馮庸大學ニ
於テ一團ノ教授連モ亦張學良ノ軍閥政治ニ對抗セム爲ニ必要ナル政治改革ノ研究ヲ始メタルカ趙
ハ此ノ一團ト接觸ヲ保テリ。

斯ノ如ク満洲ニ於テハ一九三一年九月以前ニ於テモ獨立ヲ目的トセル運動存在セルカ、此ノ點ニ
關シ委員會ハ一切ノ資料就中満洲ニ於テ新政府ノ首腦者連トノ會談ノ際ニ提供セラレタル情報ヲ
全ク無視セルヤニ見受ケラル。

報告書ハ満洲ノ獨立宣言運動ハ九月十八日ノ事件ノ結果トシテ發生セル事態ヲ收拾スル爲日本人
ニ依リ開始セラレ且組織及遂行セラレタルモノニシテ、之カ爲日本人ハ若干支那要人ノ姓名ヲ藉
リ其ノ積極的協力ヲ利用セリト述ヘ、且日本軍司令部ノ行動ニ付テハ九月十八日以後政治的動機
ノ頗ル顯著ナルモノアリ、而シテ東京參謀本部ハ右獨立運動ニ援助ヲ與ヘ其ノ組織者ヲ指導セリ
ト述ヘ居レリ。

然レトモ斯ノ如キ想定カ如何ニ根據ナキカハ少シク想ヲ回セハ自カラ明瞭ナルヘシ。張學良ノ下
ニ於テ満洲ノ秩序維持ノ責任者タリシ官憲カ九月十八日以後ニ於テ大部分逃亡セル際、引續キ日

常生活ノ機構ヲ維持スル爲ニ何等カノ組織ノ必要ナルコト明カナリキ。地方首腦者ニ依リ地方自治委員會組織セラレタルカ日本軍隊ハ彼等ノ協力ヲ歓迎シ之ヲ援助セリ。蓋シ如何ナル軍隊ト雖モ其ノ占領地域ニ對シ成ル可ク損害ヲ少ナカラシムルノ要アリ、文明生活ノ手段ヲ維持スルコトハ日本軍ノ第一ニ留意セル所ニシテ右目的ノ達成ハ自治委員會トノ協力ニ依リ初メテ可能ナリシナリ。政府ノ胚芽タル是等自治委員會カ結合シテ結局眞ノ國家ヲ成スニ至ルハ何等驚クヘキコトニ非シテ、此ノ間日本側ノ使嗾ヲ想像スルノ餘地ナシ。滿洲ハ一人ノ統治者ヲ有スルノミニシテ、支那本部ノ如ク多數ノ權力者ノ確執ニ依リ禍サルルコトナカリシモ其ノ統治ハ紊亂ヲ極メ居レリ。從テ新爲政者等カ張政權ヨリ脱セントシタルハ異トスルニ足ラス。一九三一年九月十八日以前及以後ニ於ケル滿洲ノ實情ヲ知悉スルモノニ取リテハ張政權ヲ排除セントスル決意カ一般ニ瀰漫シ、其ノ結果完全ナル獨立ヲ宣言スルノ運動ニ容易ニ進展シ得ヘキ狀況ニ在リシコトハ直ニ明瞭ナルヘシ。此ノ點ニ關シ夙ニ支那共和國ノ創立ト同時ニ起リタル清朝復辟運動カ、嘗テ清朝發祥ノ地ニシテ後ニ其ノ帝室領タリシ滿洲ト終始多大ノ關係ヲ有シタルコトモ亦之ヲ記憶セサルヘカラス。是等ノ事情ニ通曉スルモノニトリテハ當時進展シツツアリタル「獨立運動」ハ何等ノ驚異ヲ齎スモノニ非ス。從テ該運動カ全部（九七頁第二五行）又ハ一部分（九七頁第三三行）氏名不詳ノ日本人又ハ日本參謀本部ノ仕業ナリトノ想像ハ當然否定セラルヘキモノナリ。

報告書自身ノ陳述ニ依ルモ是等地方、省及國家獨立ノ運動ハ何レモ支那人、滿洲人又ハ蒙古人中ノ有力者ノ事業ナリシヲ見ル。即チ奉天ニ於テハ律師公會會長趙欣伯、張學良時代ノ東北政務委員ナリト明カナル。

會副委員長袁金凱、治安維持委員會副委員長于沖漢、奉天省主席臧式毅、吉林ニ於テハ同省主席代理熙洽、哈爾賓ニ於テハ東省特別區行政長官張景惠ナリ。而シテ新國家設立計畫ノ準備ニ當レルハ于沖漢及臧式毅ノ兩者ナリキ。國家組織ノ細目ヲ作リ且獨立宣言書ヲ起草セルハ奉天ニ集合セル奉天、吉林、黑龍江、熱河各省及東省特別區要人並ニ蒙古旗人ニシテ新國家ノ胚芽タリシ東北行政委員會ヲ構成セルハ支那人滿洲人及蒙古人ノミナリキ。

更ニ是等運動ニ關スル日時ヲ考慮セハ事實ト委員會ノ論斷トハ一致セス甚シキ撞着ヲ示シ居ルコト明カナルヘシ。奉天地方ニ於ケル治安維持委員會ハ九月二十四日設立セラレ、早クモ同二十六日ニハ奉天省及東三省ノ獨立ノ意圖ヲ表明スル宣言ヲ發セリ。同日熙洽ハ吉林省ノ獨立ヲ宣言シ、翌二十七日哈爾賓ニ於テ治安維持委員會設立セラレタリ。更ニ十月一日張海鵬ハ洮南ニ於テ獨立ヲ宣布セリ。同十七日東邊鎮守使于芷山モ亦獨立ヲ宣言シ前皇帝ヲ元首トスル滿蒙國ノ創設ヲ提唱セリ。九月十八日ヨリ右等獨立運動ノ發生ニ至ル短期間ニ於テ日本官憲カ獨立開始ノ筋書ヲ協定シ支那人、滿洲人及蒙古人ヲシテ右筋書ヲ彼等獨自ノ計畫ナルカ如ク裝ヒ右筋書ヲ即刻實施セシムルコトヲ得タリト想像シ得ヘキヤ。反之夙ニ在滿支那人及滿洲人首腦者ノ心裡ニ往來シツツモ從來發現ノ機會ナカリシ要望カ、幾多ノ缺點ヲ有シタル政府ノ消滅ヲ機トシ自發的且自然的ニ活路ヲ見出シタルモノナリト結論スルコト、右等ノ如キ想像ヨリモ一層簡明且一層合理的ナラスヤ。

獨立宣言ノ思想カ全然支那人、滿洲人及蒙古人ノ間ニ發生セルモノナルコトハ、該思想カ清朝復辟

ノ思想トモ關係ヲ有シタルニ顧レハ益々明瞭ナリ。例へハ滿洲國實業部總長張燕卿（清朝當時ニ於ケル有名ナル碩學ニシテ且政治家タリシ張之洞ノ息）及滿洲國外交部總長謝介石ハ何レモ其ノ運動特ニ清朝復辟運動ノ有力者ナリ。滿洲人ニシテ知名ノ復辟主義者タル現滿洲國財政部總長熙治モ亦是等一派ノ首腦者タリキ。日本官憲ニ於テモ斯ル思想ノ橫溢セルコトヲ承知シ居リタルハ事實ナルカ、之ニ對シ個人的ニハ同情ヲ有シタルモノアリタルモ日本政府及關東軍司令部ハ何等之ヲ獎勵スルカ如キコトナカリキ。

右ニ關聯シ九月二十六日幣原外務大臣及南陸軍大臣カ在滿日本官憲ニ對シ、滿洲ニ新政權ヲ樹立セントスル諸種ノ企圖ニ日本人ノ關與スルコトヲ嚴禁セル訓令ヲ發シタルノ事實ヲ指摘スルコト適當ナルヘシ。

是等ノ訓令ニ遵ヒ日本文武官憲ハ何レモ獨立運動ニ關與スルヲ避ケタルカ、其ノ具體化スルニ至ルヤ關東軍司令部ハ之ヲ無視スルコトヲ得サリキ。而シテ右運動ノ指導者カ其ノ計畫ヲ完成シ之ヲ開示セルニ及シテハ、秩序維持ノ終局的責任者タル關東軍當局ニ於テ該運動力新政權ヲ樹立シ一切ノ不穩分子ヲ除去スルニ至ルノ見込アルモノトシテ之ヲ重視スルヲ得サリシハ當然ナリ。

報告書ハ「自治指導部」ヲ相當重要視居ル處、同部ハ十一月十日ニ至リ初メテ創設セラレ支那人ノ管理下ニ在リタルモノナリ。然ルニ報告書ハ之ヲ以テ關東軍司令部第四課ノ一機關トナシ「日本人ニ依リ組織セラレ且大部分ノ職員ハ日本人ニ依リ充タサル」（九二頁）モノト爲シ居レリ。右ハ單ニ支那側覺書中ノ誣說ヲ其儘取入レ且之ヲ報告書ノ所謂「信憑スヘキ」證人（其ノ何人ナ

ルヤハ分明セス）ノ言ヲ以テ強メタルモノニ過キスシテ全ク事實ニ反ス。關東軍司令部ニハ常ニ滿洲ノ政況ヲ研究スル一課存在シ、一九三一年九月十八日以後ニ於テ獨立運動ノ擡頭スルニ及ヒ其ノ職掌上右運動ニ關スル一切ノ情報ヲ蒐集スルノ要アリタルハ勿論ナリ。然レトモ同課ハ既ニ十月初以來奉天省ニ於テ組織セラレタル治安維持又ハ獨立ヲ企圖セル各種委員會ノ活動ヲ統制スルノ目的ヲ以テ于冲漢ノ統率下ニ組織セラレタル「自治指導部」トハ何等ノ關係ヲ有セサリキ。趙欣伯ハ調查委員會ニ對シ自己ノ主宰スル會カ、九月十八日直後ニ於テ獨立委員會ヲ結成シ新政府樹立ニ關スル要人ノ意図ヲ確ムル爲省内各地方ニ代表ヲ派遣セル次第ヲ陳述セリ。

最後ニ報告書ハ政府ノ變革ヲ目的トスル斯種運動ハ日本軍隊ノ存在ナカリセハ遂行不可能ナリシナルヘキ旨ヲ述ヘ居レル處、日本軍隊ハ正當ノ權利ニ依リ駐在シ居ルモノニシテ條約上ノ權利ニ基キ鐵道附屬地ニ駐屯シ且自衛權ノ行使トシテ附屬地外ニ出動セルモノナリ。獨立運動ハ右ノ結果發生シタル狀態ヲ利用シタルモノナリトスルモ、其ノ事實ハ同運動カ自發的ナリシコトヲ妨クルモノニ非ス。他ノ諸大陸ニ於テ外國軍隊ノ存在カ獨立ノ達成ヲ可能ナラシメタル事例、及斯クシテ達成セラレタル獨立カ何等問題トセラレサリシ事例ハ多々アリ。

一九二二年ノ九國條約ハ締約國ニ對シ支那ノ主權侵害ヲ禁スルモノナリトノ議論アルヘキ處、右ハ正當ナル議論ナルモ此ノ場合ニハ何等ノ關係アルコトナシ。一締約國カ其ノ適法ノ權利ヲ偶々支那ノ領土内ニ於テ正當ニ行使スルモ、該國ハ右權利行使ノ結果ニ對シ責任ヲ問ハルヘキモノニ非ス。若シ其ノ結果カ支那ノ主權並ニ保全ヲ害スルコトアリトスルモ之カ責ヲ負フヘキハ該國ニ

非ス。從テ假令張學良治下ノ滿洲カ眞ニ支那ノ完全ナル一部ナリシトスルモ日本ハ其ノ正當且必要ナル行動ノ結果ニ對シ責任ヲ負フコトヲ得ス。將又假ニ支那カ眞ニ滿洲ニ於テ統一アル行政ヲ行フ組織アル國家ナリトスルモ亦同様ナリ。

要スルニ現在ノ政權ヲ自然ニシテ自發的ナル運動ノ成果ナリト認メサルコトハ滿洲國ノ提出セル一切ノ證據ヲ無視セルコトヲ示スモノナリ。滿洲國政府ノ作成シ委員會ニ提出セル「滿洲建國小史」ハ滿洲各地ニ續發セル獨立運動ニ關スル記述ヲ載セ、關係者ノ姓名、宣言文及決議文ヲモ掲載シ正確且卒直ナル記述ヲナシ居レリ。即チ同書ニ依レハ是等運動ニハ商業、工業、農業及教育ノ諸團體（中ニハ會員數千ニ達セルモノアリ）其ノ代表者ヲ出シ、建國會議ニ對シテハ從來ノ慣例ニ從ヒ各地方ニ於テ四個ノ代表的地方團體ノ一致ヲ以テスル代表者ヲ任命セリ。從テ一九三二年二月二十九日奉天ニ於テ新國家ノ樹立ヲ宣言シタル全滿聯合大會ハ各方面ノ利益ヲ充分代表シタルモノナリ。報告書モ滿洲政府ノ施政ニ對スル民意如何ヲ確ムル爲ノ實際的方法ヲ述フルニ當リ商會、職業組合及他ノ民間諸團體ニ依ル右ト全然同様ノ傳統的代表制度ヲ提案シ居ルハ奇ナリト言フヘシ（一三四頁）。

要之、第六章中ノ右ノ部分ニ於ケル委員會ノ論斷ハ新政權ノ根底ヲ成ス歴史的要素ニ反シ、又潛在セル感情ヲ喚起シタル心理的及物質的原因ニ反シ、且滿洲人民ノ間ニ存在シ新國家樹立ノ結果ヲ齎セル獨立運動ノ自發的性質ヲ證明セル一切ノ事實ニ反ス。

日本政府ハ滿洲獨立宣言ノ運動カ純正ニシテ自發的ナルト共ニ民意ニ合シ且自然的ナルモノナリト認メラル。

口、住民ノ滿洲國ニ對スル態度

委員會カ其ノ意見ヲ作成スル基礎トシテ有シタル材料左ノ如シ。

一、支那人、滿洲人、蒙古人、日本人、朝鮮人、露西亞人等ニシテ商會並ニ政治、農業及教育等ノ各界ヲ代表セル人々ヨリ成ル相當權威アル諸團體ノ發セル請願書及宣言書

二、郵便又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ送付セラレ、多分支那人ヨリ出テタルモノト見ラルヘキ十五百五十通ノ書信

三、實業家、銀行家、教師、醫師、警察官吏等トノ私的會談

本節ノ特徵トシテ顯著ナルハ素性知レサル支那人ノ書簡ニ對シテ過大ノ信用ヲ與ヘタルコト（是等書簡ハ二通ヲ除キテハ總テ滿洲國及日本ニ取リ不利ナリト稱セラル）、並ニ公ノ覺書及前政權ニ充分ナリカ又ハ不

證據ニ對スル信用過度ナル

對スル人民ノ不満ヲ列舉シ其ノ要望ヲ表明セル諸種ノ責任アル團體ノ請願及宣言ヲ輕視セルコト之ナリ。

委員會ハ新國家ノ成立ニ反對セル千五百四十八通ノ書簡ヲ受取リタリト云フモ、由來支那側宣傳振ノ猛烈ナルニ顧ミレハ書簡ノ數カ右ニ止リタルハ寧ロ意外ナリト云フヘシ。蓋シ滿洲ニハ約三千萬ノ人民アル處委員會ニ其ノ意向ヲ通告セルモノカ二萬人ニ付一人ニ過キストセハ此ノ事實ハ寧ロ滿洲國ニトリ有利ナルモノニ非スヤ。他方滿洲國ヲ歡迎スル數千ノ民衆ノ諸種ノ會合ニ依リテ表示セラレ且責任アル代表及有力ナル市民ノ證言ニ依リテ支持セラレタル明白ナル證據ハ、一概ニ日本側ノ策動ニ依ルモノトシテ無下ニ却下セラレタリ。組織的ノ「搾取」、壓迫及欺瞞政治ノ犠牲トナリ來レル人民カ、日本側ノ脅迫及買收ヲ俟ツ迄モ無ク、少クトモ彼等ノ勞働ノ成果ヲ保障セル政府ヲ是認シタルヘキハ極メテ賭易キ所ナリ。反之農民及勞働者ノ態度カ「外國人及教育アル支那人」(一〇九頁)ノ意見ヨリシテ窺ヒ知ルコト能ハサルハ勿論ナリ。

官吏、警察官、軍人、實業家、銀行家等爾餘ノ諸階級ニ關シテハ報告書ハ苟モ滿洲國ニ敵意ヲ有スルモノニ付テハ一々之ヲ記錄ニ止メナカラ、滿洲國ヲ支持スルモノニ付テハ利害ノ打算又ハ恐怖心ニ依リ動カサレタルニ止マリ何等愛國的理想ニ依ルモノニ非ラストシテ之ヲ排シ居レリ。最後ニ報告書ハ支那人ノ滿洲國ニ對スル反感ヲ強調シ乍ラ朝鮮人、露西亞人及蒙古人カ新國家ニ對シ衷心ヨリ示シタル贊成ニ付テハ極メテ簡單ニ之ヲ説明シ去ラントシ、朝鮮人ノ新政ニ對スル歓迎ノ事實ハ認ムルモ而モ卒直ニ之ヲ爲サスシテ此ノ歓迎カ果シテ何時迄續クヘキヤト反問シ、

又蒙古人ノ概シテ同情的ナル態度ヲ認メツツモ張學良ノ勢力下ニアル北京ニ於テ蒙古王族代表者ノ爲シタル一個ノ反滿洲國宣言ヲ取立テテ強調シ居レリ。

幸ニシテ事實ハ報告書中ノ不利ナル描寫ヨリモ遙カニ有望ナリ。「滿洲建國小史」中ニ詳細ニ敍述セラレアルカ如キ新國家建設直前ノ幾多ノ大民衆示威運動ニ付再言スル迄モナカルヘク、又滿洲國反對者ノ努力ニモ拘ラス人民カ新政ニ對シ引續キ歓迎ノ意ヲ示シツツアル顯著ナル事例ヲ舉クルノ要モナカルヘシ。蓋シ新政ハ清朝覆滅以來滿洲地方住民カ初メテ享受セル文治的政府ニシテ現在ノ支那ヲ支配シ居ル軍閥獨裁政治ニ比シ極メテ顯著ナル對照ヲ成スモノナリ。

ハ、滿洲國ノ組織及將來

報告書ハ第六章ニ於テ滿洲國ノ組織及其ノ政綱並ニ同國カ其ノ獨立ヲ確保スル爲執リタル各種ノ手段ヲ敍述シタル後、次ノ如ク述ヘ居レリ。

此ノ「政府」ノ政綱ハ數多ノ自由主義的改革案ヲ包含シ、是等ノ實施ハ單ニ滿洲ニ於テノミナラス、支那ノ他ノ部分ニ於テモ亦望マシキモノナルヘシ。事實是等改革ノ多數ハ支那政府ノ政綱中ニモ亦顯ハレ居レリ。本委員會トノ會見ノ際、右「政府」ノ代表者ハ日本人ノ援助ニ依リ彼等ハ相當期間中ニ平和ト秩序ヲ確立スルコトヲ得ヘタ、而シテ纏テハ之ヲ永遠ニ維持スルコトヲ得ヘシト主張セリ。彼等ハ人民ニ對シ公正ニシテ且有效ナル行政、匪賊ノ掠奪ニ對スル保障、軍費削減ノ結果タル租稅ノ輕減、通貨ノ改革、改善セラレタル交通機關及一般人民ノ政治參與權等ヲ與フルコトニ依リ、人民ノ援助ヲ獲得スルヲ得ヘシトノ信念ヲ述ヘタリ(一〇五一)

四百一

然ルニ報告書ハ一面右ノ如キ樂觀スヘキ材料ヲ舉ケツツ、他面現在迄「滿洲國政府」カ其ノ政策ヲ遂行スル爲費シタル時日ノ短キコトヲ充分酌量シ、且既ニ講セラレタル手段ニ對シ篤ト考量ヲ加フルモ、猶此ノ「政府」カ事實上其ノ改革ノ多數ヲ遂行シ得ヘキコトヲ示ス何等ノ徵候モ存セス、單ニ一例ヲ舉ケンニ彼等ノ豫算制度及貨幣制度ノ改革實現ノ前途ニハ幾多重大ナル障礙存スルカ如シ」(一〇六頁)トノ論斷ヲ敢テシ居レリ。

右ニ引用セル委員會ノ批評ハ第一章中ノ左記ノ如キ批評ニ比スレハ頗ル奇異ナル對照ヲ成セリ。
支那本部
ニ對革案
報告書ノ
批評

現政府ハ其ノ歳出及歳入ノ均衡並ニ健全ナル財政的原則ノ遵守ニ努メ來レリ。諸種ノ課稅ハ統一ニシテ且首領ニシラヌ、又其象算則度ニシテ才文部、毎三度、歲占又殘入ノ日月

右ニ引用セバ委員會ハ批評ノ第一章中ノ方言ハ如キ批評ニ比シレハ既別ナル對照シテ改モ
ニ對スル告書ノ批評

此悲劇觀下別ハ何故ナリヤ

現政府ハ其ノ歳出及歳入ノ均衡並ニ健全ナル財政的原則ノ遵守ニ努メ來レリ。諸種ノ課稅ハ統一セラレ且簡單化セラレタリ、本來豫算制度ナキヲ以テ財政部ハ毎年度ノ歳出及歳入ノ説明書ヲ發表シ來レリ。中央銀行ハ設立ヲ見タリ。國家財政委員會任命セラレ其ノ委員ニハ銀行及商業界ノ有力者包含セラル。財政部ハ又徵稅ノ方法未タ甚タ満足ナラサル地方ノ財政ヲ監督スルニ努メツツアリ。總テ是等ノ新ナル措置ハ政府ノ功ニ歸セラルヘキモノナリ、、、、、、、、
、政府ハ數多ノ事項ニ付失敗シタルコト疑ナキモ、而モ既遂ノ業績多々アリ（一七一—八頁）
委員會カ列舉シタル支那ノ各種ノ改革案ハ實際上殆ト何等ノ實績ヲ舉ケ得サリシニ拘ラス、右等改革案存スルノ故ヲ以テ支那ハ多クノ事ヲ成シ遂ケタリト賞讃セラレ居ルニ反シ、満洲國カ不當ノ觀點ヨリ不公平ノ判決ヲ下サレ居ルハ注目ニ値ス。

日本政府ハ委員會ノ悲觀的意見ノ根據ニ對シ敢テ詳細ニ瓦リテ論議ヲ加ヘムトルノ意圖ナシ。

蓋シ事實ハ言語ヨリモ雄辯ナレハナリ。只重要ナルニ點、即チ日本軍ト満洲國政府トノ協力ニ基ク治安恢復ノ措置及同國政府ノ財政狀態ニ付理事會ノ注意ヲ喚起セムトスルモノナリ。

新生ノ國家ニ於テ反動分子又ハ不平分子ノ策動ニ依リ治安ノ亂サルルハ世界共通ノ現象ナリ。殊復治安ノ恢

ノ段階ト爲シ居レリ。一方滿洲國政府ハ現存ノ交通機關ヲ改良シ以テ治安恢復事業ヲ容易ナラシメントシツツアリ。右第一段階ノ工作ハ、委員會カ滿洲國ニ在リタル當時以來、著シク進捗セルコトヲ述ヘサルヘカラス。即チ新國家ニ對スル最モ手剛キ叛徒タリシ馬占山指揮下ノ部隊ハ既ニ擊滅セラレ、又李海青指揮下ノ部隊モ既ニ敗退セリ。丁超及李杜ノ部隊ハ東支鐵道東部線北方奥地ニ驅逐セラレタリ。南滿ニ於テモ、同地方ノ治安攬亂ノ主要ナル禍源タリシ奉海線ヨリ鴨綠江岸ニ至ル地域ニ於ケル有力ナル匪賊團ハ、日滿聯合軍ニ依リ既ニ掃討セラレ、其ノ他ノ大集團モ奉天、熱河兩省境ノ奥地ニ壓迫セラレ居レリ。要スルニ南北滿洲ノ近狀ハ、總括的ニ云へハ滿洲國政府ヲシテ前記第二ノ段階即チ警察組織ニ依ル治安恢復ニ依ル段階ニ入ルコトヲ可能ナラシムル事態トナリツツアリ。

支那側ノ
匪賊援助ノ

ルノ事實ナリ。是等ノ支持ニ付テハ、其ノ陰密ニ行ハル幾多ノ事例ヲ舉クル迄モナク、滿洲ノ匪賊ヲ援助スル爲ノ資金ノ募集カ支那本部ノ各都市ニ於テ公然行ハレ居ルコトヲ指摘スレハ足ルヘシ。

尙注意ヲ要スルハ、最近ニ於テ大集團ノ活動ニ依ル治安ノ脅威ノ減少セルニ比例シテ、多數ノ小集團ノ活動カ益々政治的策動ノ色彩ヲ帶ヒ來レルノ事實ナリ。例へハ最近滿洲ニ於ケル匪賊及誘拐者ノ活動ハ主トシテ外國人ヲ目標トシ、之ニ依リテ新興國ノ信用ヲ阻害セムトシツアル處、右ハ滿洲ノ狀況カ從前ヨリモ惡化セルカ如キ外觀ヲ與ヘントスル支那側反滿洲國分子ノ計畫的策動ナリト信セラル。

最後ニ日本政府ハ滿洲ニ於ケル治安ノ完全ナル恢復ハ尙相當ノ時日ヲ要スヘキコトヲ豫想シ居ルモノナルカ、斯ノ如キハ類似ノ狀況ニ在ル何レノ地方ニ於テモ常ニ見ル所ナリ。然レトモ日本政府ハ之ト同時ニ報告書ニモ援用セラル通、日本軍ノ存在ニ依リ、滿洲ニ於ケル主要匪賊部隊ヲ二年乃至三年以内ニ一掃シ得ヘントノ確信ヲ茲ニ繰返スヲ以テ足レリト思考スルモノナリ。而シテ日本政府ハ、委員會カ日本側ノ態度トシテ「日本官憲ハ滿洲國警察及各部落ニ於ケル自衛團ノ組織カ匪賊ヲ消滅セシムルニ有效ナルヘキコトヲ望ミ居レリ。現在ノ匪賊ノ多數ハ元來良民ニシテ、其ノ財產ヲ總テ失ヒタル爲現在ノ職業ニ投スルニ至レルモノト信セラレ居レリ。農業ヲ再ヒ營ム機會アラハ、是等ノ匪賊ハ從前ノ平和的生活ニ復歸スヘキコト望マレ居レリ」(八三頁)ト述ヘタル所ヲ茲ニ自家ノ言トシテ採用セントスルモノナリ。

財政 滿洲國ノ財政狀態ニ關シテハ、理事會ハ滿洲國政府ノ提供セル左記資料ニ依リ、報告書中ノ悲觀

の意見カ如何ニ根據無キモノナルヤヲ容易ニ了解シ得ヘシ。

歲入及歲出
一九三二年三月一日建國以來、同年(大同元年)六月三十日迄ノ中央收支狀況ハ、收入(各稅收入及鹽務關係收入)九百三十萬圓、支出九百十萬圓ニシテ、建國當初即チ調查團滯滿當時ニ比シ遙カニ良好ナル成績ヲ示シタリ。

滿洲國ニ於テハ其後海關ノ接收ヲ完了シ(六月)、各省財政廳ヲ廢止シテ(七月)財政ノ中央集權_{中政一九財三二一三年度豫算}ヲ行フ等、着々トシテ財政ノ基礎建設ニ努メタル結果、大同元年度豫算(自一九三二年七月一日至一九三三年六月三十日)ニ於テハ、歲入一億百萬圓、歲出一億一千三百萬圓ヲ算シ、滿洲國ノ財政的地位ハ頗ル満足スヘキモノトナリタリ(右豫算中軍費ハ三千三百萬圓ニシテ、一九三〇年

度ニ於ケル張家時代ノ軍事費一億圓ノ約三分ノ一二過キス、又同豫算ハ一千二百萬圓ノ歲入不足ヲ示シ居ルモ、一方同豫算ハ一千五百萬圓ノ豫備費ヲ計上シ居ルコトヲ考慮スルヲ要ス)。

次ニ滿洲國ノ幣制ニ付テハ、滿洲中央銀行ハ資本金三千萬圓ヲ以テ創立セラレ、開業當初舊省銀行ヨリ引繼キタル銀行紙幣流通高一億四千二百萬圓ニ對シ、正貨準備八千二百萬圓、保證準備六千萬圓ヲ以テ七月一日營業ヲ開始セリ。

右ニ關シ、一八八二年日本銀行カ一千萬圓ノ銀資本ヲ以テ創立セラレ全國ニ於ケル國立銀行ノ發行紙幣ヲ統一スルニ成功シタル事實、並ニ滿洲國ノ經濟貿易人口ノ狀態等ヲ考慮セバ、右資本金額ハ十分ナリト認メラル。

匪賊ハ相當威懾ノ使
滿洲國ノ使
信_セ用_セチ害
ト_セノト_セ
ハ_セル策動行
ト_セ明_セカ_セナ

滿洲國政府ニ於テハ同銀行ノ獨立性ヲ尊重シ、發券銀行トシテノ機能ヲ妨ケサル様萬全ノ注意ヲ拂ヒツツアルヲ以テ、滿洲中央銀行乃至滿洲國幣制ノ基礎不安ナリト謂フハ全然當ラス。現ニ同銀行開業以來三ヶ月餘ヲ經過シ、其ノ間紙幣ハ完全ニ本位價值ヲ維持シ、通貨ハ全ク安定シ、其ノ流通極メテ順調ナリ。右ハ張家時代ノ實情ニ對シ顯著ナル對照ヲ成スモノナルコトヲ知ルヘシ。

滿洲ハ輸出超過國ニシテ毎年多額ノ銀ノ流入アルヲ以テ、將來ト雖モ其ノ貨幣價值ノ維持ニハ何等ノ不安無カルヘシト認メラル。

滿洲國ノ將來ニ關シ、慎重ナル考慮ニ基ケル其ノ意見ヲ茲ニ強ク述ヘ置カント欲ス。

滿洲國ハ輝カシキ將來ヲ有ス。滿洲國ハ廣大ナル領土及多數ノ人口ヲ有スルニ加ヘ、天然ノ國境ニ圍マルルノ有利ナル地位ニ在リ。同國政府ハ、支那ノ締結セル凡ユル國際約定ハ、其ノ滿洲ニ適用シ得ヘキ限り之ヲ尊重シ、且門戶開放及機會均等ノ原則ヲ忠實ニ遵守スヘキ旨ヲ自發的ニ聲明セリ。同政府ハ排外的感情ヲ有セス、支那ニ於ケルカ如キ共產主義ノ災禍ナシ。固ヨリ滿洲國ハ今猶幼年時代ニ在リ、支那ニ屬スル凡ユル悲觀的材料ニモ拘ラス同國ニ對シ多大ノ同情ヲ示シタル委員會ハ、創建後六ヶ月ニ滿タサル國家ニ對シ多少ノ忍耐ヲ示シテコソ公正ナル態度ト稱スヘキナリ。

日本支那滿洲國ノ將來ニ關スル記述中、滿洲國ノ一切ノ政治的及行政的權力ハ日本人官吏及顧問

示唆ストノ

ノ手中ニ在リトノ全然理由ナキ推測ヲナシ、又是等ノ官吏ト東京政府トノ間ニ時ニ意見ノ相違アリタル旨ヲ記スル一方、軍事占領ノ事實及滿洲國ノ主權及獨立ノ維持カ日本軍隊ニ依倚シ居レリトノ理由ヲ以テ、日本人官吏ハ滿洲國政府ニ對シ不可抗力ノ壓力ヲ加フル凡ユル方法ヲ有スト述ヘ居ル處、日本政府ハ斯クノ如キ言說ニ對シ敢テ反駁ヲ加フルヲ潔シトセス。

斯ル非謗カ國際聯盟ノ注意ヲ惹キ得サルヘキヲ信ス。蓋シ現在ニ於テモ亦過去ニ於テモ、一般ニ獨立國トシテ認メラレタル國家ニシテ、多數ノ外國人官吏ヲ傭聘シ、又ハ其ノ領土内ニ他國軍隊ヲ駐屯セシムルモノ多數アリ。聯盟國ハ最近ニ於テ、一國內ニ於ケル外國軍隊ノ存在カ同國ノ聯盟加入ニ對スル何等ノ障害ヲ成スモノニ非サルコトヲ認メタリ。

最後ニ、報告書ハ日本ト滿洲國トノ關係ヲ明瞭ナラシムルニ當リテ委員會ノ經驗シタル困難ヲ強調シ居レル處（一〇六頁）、今ヤ右困難ハ一九三二年九月十五日ノ議定書ノ署名ニ依リテ消失セリ。本議定書ハ次ノ如シ。

日本國ハ滿洲國カ其ノ住民ノ意思ニ基キテ自由ニ成立シ獨立ノ一國家ヲ成スニ至リタル事實ヲ確認シタルニ因リ

滿洲國ハ中華民國ノ有スル國際約定ハ滿洲國ニ適用シ得ヘキ限り之ヲ尊重スヘキコトヲ宣言セルニ因リ

日本國政府及滿洲國政府ハ日滿兩國間ノ善隣ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ニシ互ニ其ノ領土權ヲ尊重シ東洋ノ平和ヲ確保センカ爲左ノ如ク協定セリ

一 滿洲國ハ將來日滿兩國間三別段ノ約定ヲ締結セサル限リ滿洲國領域内ニ於テ日本國又ハ日本國臣民カ從來ノ日支間ノ條約、協定其ノ他ノ取極及公私ノ契約ニ依リ有スル一切ノ權利利益ヲ確認尊重スヘシ

益ヲ確認尊重スヘシ

二 日本國及滿洲國ハ締約國ノ一方ノ領土及治安ニ對スル一切ノ脅威ハ同時ニ締約國ノ他方ノ安寧及存立ニ對スル脅威タルノ事實ヲ確認シ兩國共同シテ國家ノ防衛ニ當ルヘキコトヲ約ス之カ爲所要ノ日本軍隊ハ滿洲國內ニ駐屯スルモノトス

本議定書ノ何レノ規定モ、又新政府ニ對スル如何ナル協力行爲モ、日本ノ國際義務ニ何等違背スルコトナキハ之ヲ指摘スルノ約束ニ要ナカルヘシ。華府九國條約ニ依リ日本ハ支那ノ主權及其ノ領土的行政的保全ヲ尊重スルノ約束ニ參加セリ。然レトモ右約束ハ支那ヲシテ國家生存上通常發生スル事故ヨリ免カレシムルコトヲ目的トスルモノニ非ス、又右約束ハ支那國民ヨリ自決ノ權利及健全ニシテ滿足スヘキ政府ヲ樹立スルノ權利ヲ剝奪スルコトヲ目的トスルモノニモ非ス。從テ其ノ當然ノ歸結トシテ、右約束ハ各締約國ヲシテ國際修交上ノ必要ニ基キ既成ノ事實ヲ承認スルコトヲ妨クルモノニ非ス。將又之ト同様ニ、國際聯盟規約第十條モ亦「外部ヨリノ侵略ニ對シ」聯盟國ノ領土ノ保全ヲ尊重シ且擁護スルヲ目的トスルモノナル處、國內ノ發展ニ依リ聯盟國ノ領土ノ保全カ害セラルルコトアリトスルモ、規約中ニハ之ヲ承認セムトスル他ノ聯盟國ノ權利及義務ヲ妨ケル何等ノ規定ナシ。之ニ反スル解釋ヲ固執スルハ、歐洲ニ於ケル多數諸國及米大陸ニ於ケル大多數ノ國家存立ノ基礎ヲ否定スル結果トナルヘシ。

第五章 結論

日本ノ主張

支那ノ變更
則の國情

敍上日本政府ノ述へ來レル所ハ之ヲ要約スレハ左ノ諸點ニ歸着ス。

第一、支那カ一九一一年ノ革命以來今日ニ至ル迄無政府ニ近キ混亂狀態ニ在ルコト、而シテ同國ハ斯ル事態カ持續スル限りハ國家的崩壞ノ狀態ニ在リト見ルノ外ナキコト、少クトモ現下ノ事態ニ於テハ支那カ鞏固ニシテ永續性アル中央政府ヲ有スルニ至ル時期ノ到來ハ、假ニ窮極ニ於テ可能ナリトスルモ其ノ何時タルヤハ到底豫斷スルノ不可能ナルコト。

第二、右狀態ノ結果トシテ支那ハ外國人ノ生命財產ニ對シ充分ナル保護ヲ與ヘ得サルコト、殊ニ近年ニ於テ内爭ノ深刻化及國民黨ノ外國ニ對スル所謂「革命」外交政策實施ノ結果前記ノ狀況ハ益々著シクナレルコト。

第三、從テ諸外國ハ支那ニ於テ治外法權、租界、駐屯軍ノ維持、内水ニ於ケル軍艦ノ常駐ト云フカノタタルノ結果ノ自衛權の繼續的行使ニ日本ハ特ニ被害ヲ受ケタリ

日本ハ滿洲ト關係ニ在リ日本ノ關稅外國人ノ生命財產ニ對シ充分ナル保護ヲ與ヘ得サルコト、加之國家安全ノ見地ヨリ政治上及戰略上滿洲ニ對シ重大ナル關心ヲ有スルコト、要之日本ノ滿洲ニ於ケル地位ハ

日本ハ滿洲ト關係ニ在リ日本ノ關稅外國人ノ生命財產ニ對シ充分ナル保護ヲ與ヘ得サルコト、加之國家安全ノ見地ヨリ政治上及戰略上滿洲ニ對シ重大ナル關心ヲ有スルコト、要之日本ノ滿洲ニ於ケル地位ハ

國際義務
ニ違反セ

第六、近年舊滿洲官憲カ右特殊地位ヲ覆滅セントスル意圖ヲ以テ各種ノ策動ヲ爲シ、殊ニ張學良ノ國民政府トノ接近後ニ於テハ日本ノ權益ニ對スル右侵迫ハ益々頻繁且熾烈トナリ來リ形勢緩和ニ對スル日本側百方ノ努力ニモ拘ラス警戒ヲ要スヘキ緊張狀態ヲ招來セルコト。

日本ノ軍正事行動ハ當ナリ
第七、九月十八日事件ハ右ノ如キ緊迫セル空氣ノ裡ニ起レルコト、該事件ノ當時又ハ其ノ後ニ於テ日本軍ノ執リタル措置ハ何レモ自衛權ノ範圍ヲ逸脱セルモノニ非サリシコト、公平ニ見テ日

第八、滿洲カ支那本部ニ對シ常ニ地理的及歴史的ニ別個ノ地位ニ在リタルコト、其ノ住民カ張家
ノ暴政ヲ憎惡シ同地方ヲ支那本部ノ政爭ノ渦中ニ投スルノ政策ニ反対セルコト、右地理的歴史
的事情及住民ノ張家ニ對スル反対ハ相俟ツテ所謂「保境安民」運動トナリタルコト、滿洲國ノ
創設ハ右運動及清朝復辟運動ヲ主動力トシタル滿洲住民ノ自發的行爲ニ基クモノナルコト、滿
洲國ハ穩健ナル政策ノ下ニ着實ナル進歩ヲ爲シ其ノ將來ハ極メテ有望ナルコト、最後ニ滿洲國
ノ建設ニ對シ日本ノ執リタル態度及之ヲ正式承認スルニ至レルハ何等國際約定ニ反セサルコト
要スルニ問題ヲ正當ニ了解センカ爲ニハ左ノ二點ヲ念頭ニ置クヲ要ス。即チ、第一ニ、支那ノ事
態ハ極メテ變則的ニシテ近代的組織アル國家トシテノ資格ヲ認メ難ク從テ諸外國ハ其ノ權益ヲ自
ラ擁護スル爲支那主權ノ制限ヲ來スカ如キ例外的の權力及特權ヲ保有スルノミナラス必要ニ應シ隨
時之ヲ行使スルヲ常トセルコト、及第二ニ、對外關係ニ於ケル支那ノ特徵ハ之ヲ日滿關係ニ付テ
約 說

ノ解釈ニラ日本場合ニ於テ特殊ノ地位及満洲ト支那本部トノ特殊ノ關係ニ鑑ミ特ニ著シキモノアルコト之ナリ。而シテ特ニ強調ヲ要スルハ敍上支那問題殊ニ満洲問題ノ複雜性及變則的特色ハ他ニ其ノ比類ヲ見サルノ一事ナリ。從テ之カ處理ニ當リテハ普通國際問題ニ對スル一般的方式ヲ其ノ儘適用スルコト困難ナルト共ニ、斯ル變則的問題ニ關スル手續又ハ結局到達セラルヘキ如何ナル解決方法モ通常ノ國際紛爭ニ對スル先例トハナラサルモノナリ。此ノ點ニ關シ報告書第九章冒頭ニ左ノ如ク述ヘ居ルハ味フヘキ點ナリ。

前章ノ讀者ニトリテハ本紛争ニ包含セラルル諸問題ハ、往々稱セラルルカ如ク簡單ナルモノニ
非サルコト明白ナルヘシ。即チ問題ハ寧ロ極度ニ複雜ナリ。一切ノ事實及其ノ史的背景ニ關ス
ル徹底セル知識アルモノノミ事態ニ關スル確定意見ヲ表示シ得ル資格アリト謂フヘキナリ。本
紛争ハ一國カ國際聯盟規約ノ提供スル調停機會ヲ豫メ利用シ盡スコトナクシテ他ノ一國ニ宣戰
セル事件ニ非ス、又一國ノ國境カ隣接國ノ軍隊ニ依リ侵略セラレタルカ如キ簡單ナル事件ニモ
非ス、何トナレハ滿洲ニ於テハ世界ノ他ノ部分ニ於テ正確ナル類例ヲ見サル幾多ノ特殊事態存
スルヲ以テナリ（一二六頁）。

以上ハ支那問題殊ニ滿洲問題ニ關スル日本政府ノ基本的見解ナルカ、茲ニ右見解ニ基キ報告書第

第九章中ノ一節ニハ「單ナル原狀恢復カ問題ノ解決タリ得サルコトハ既ニ吾人ノ述ヘタル所ニ依リ明カナルヘシ。蓋シ本紛爭カ去ル九月前ニ於ケル狀態ヨリ發生セルニ顧ミ該狀態ノ恢復ハ單ニ

紛糾ヲ繰返ス結果ヲ招來スルニ止マルヘク、斯クノ如キハ全問題ヲ理論的ニ取扱ヒ事態ノ現實性ヲ閑却スルモノナリ」（一二七頁）トノ記載アリ。

維持スル國ノ
カラクハ必
要カ
満洲國ノ
維持及承認モ亦均シク不満足ナリトナシ居ル點ハ之ニ同意スルヲ得ス。假ニ報告書記載ノ事實ヲ全部真ナリトスルモ之カ當然ノ歸結トシテ右ノ如キ論斷ニ達スルコトハ不可能ナリト云ハサルヘカラス。滿洲國ノ維持及承認ヲ基礎トスル解決カ何等國際義務ノ根本原則ニ違反スルモノニ非ナルコト、又斯ル解説カ満洲住民ノ希望ヲ満足スルモノナルコトハ既ニ述ヘタル通ナリ。加之究極ニ於テハ支那國民自身モ斯種解決ニ依リテノミ日支ノ關係ヲ安定シ東洋ノ平和ヲ確保シ得ヘキコトヲ了解スルニ至ルヘキハ日本政府ノ確信スル所ナリ。少クトモ既ニ一度其ノ成立ヲ見且着々健實ナル發達ヲ遂ケツツアル滿洲國ヲ解體スルコトカ、果シテ「現實ノ事態」ニ適應スル所以ナリトハ到底首肯スルコトヲ得ス。問題ノ處理調整ハ現實ノ事態ニ即スルヲ要スルニ顧ミ、滿洲國存在ノ嚴肅ナル事實ヲ無視シ又ハ同國ヲ國際修交ノ圈外ニ置クハ斷シテ策ノ得タルモノニ非サルコト日本政府ノ信シテ疑ハサル所ナリ。

日本ハ滿洲ニ於テ重大且特殊ナル地位ヲ占ムルヲ以テ同地方ノ事態及日滿ノ關係ヲ不定不安ノ狀態ニ放置スル能ハス。敍上ノ諸理由ニ依リ日本政府ハ滿洲國ニ對シ各國カ直ニ承認ヲ與ヘ其ノ健實ナル發達ノ爲協力ヲ客マサルコトカ最モ現狀ニ適應スル所以ニシテ且滿洲ノ事態ヲ安定シ延イテ極東ノ平和ヲ齋スヘキ唯一ノ解決方法ナリト思考スルモノニシテ、假ニ他國カ日本ト同一地位

ニ在リタリトセハ必スヤ同一ノ結論ニ到達シ且同一ノ方途ヲ辿リタルヘキコトヲ確信ス。之即チ日本政府カ敍上根本的考慮ニ立脚シ兩國間ノ關係ヲ明定セル九月十五日ノ日滿議定書ニ署名シタル所以ナリ。右議定書締結ノ結果日本ノ在滿權益ヲ擁護シ、滿洲國ノ領土ヲ保全シ及内外ノ脅威ニ對シ其ノ安全ヲ確保スルノ基礎ハ談笑ノ間ニ確立セラレ極東平和ノ維持ニ對シ新ニ有力ナル保障ヲ與ヘタリ。

此ノ點ニ關シ報告書第十章冒頭ノ一節ヲ茲ニ引用スルコト適當ナルヘシ。

吾人カ國際聯盟ノ諸原則、支那ニ關スル諸條約ノ精神及字句並ニ平和ノ一般的利益ヲ顧念スルト共ニ他方現實ノ事態ヲ看過スルコトナク、且東三省ニ現存シ目下發展ノ過程ニ在ル行政機關ヲ考慮ニ入レタルハ一ニ此ノ目的ニ出ツルモノナリ。事態カ如何ニ決着スルトモ、刻下滿洲ニ於テ釀成セラレツツアル一切ノ健全ナル力ハ其ノ理想タルト人物タルト將又思想タルト行爲タルトヲ問ハス總テ之ヲ利用シ、以テ支那及日本兩國間ノ永續的了解ヲ確保セントスル目的ヲ以テ、本報告書中ノ諸提議カ今猶日々ニ進展シツツアル事態ニ如何ニ擴張シ適用セラルヘキカヲ決定スルコトハ、世界平和ノ至高ナル利益ノ爲理事會ノ職能ナルヘシ（一三二頁）。

右委員會ノ意見ヲ參酌シツツ報告書ヲ檢討スルニ當リ、聯盟理事會ハ恐ラク其ノ後ニ於ケル事態刻々ノ推移ニ關シ充分ナル理解ト満足ナル情報ヲ希望スルナルヘク、而シテ右事態ノ推移ハ支那本部ニ於テハ依然トシテ混亂ヲ繼續スル一方、滿洲國ニ於テハ着々發達ノ遂ケラレツツアル事實ヲ示スモノナリ。日本政府ハ理事會ニ對シ此ノ上トモ必要ナル情報ヲ供給シ、以テ本意見書緒言ニ

洲ノ安定期
付特ニ有
日本ハ滿
洲ニ付特ニ
キコトヘ

述へタルカ如ク各理事ヲシテ此ノ複雜ナル事態ノ全貌ヲ充分ニ把握セシメムトスルノ用意アリ。報告書ハ第十章中ニ若干ノ提議ヲ爲シ居レル處、同章ハ「現在ノ紛争ヲ解決スル爲支那及日本兩國政府ニ直接ニ勸告ヲ提出スルコトハ本委員會ノ職能ニ非ス」(一三二頁)トノ記述ヲ以テ始マリ居リ、右ハ委員會ノ所定任務ニ顧ミ當然ノコトニ屬ス。又是等ノ提議カ單ニ第九章掲記ノ諸原則ヲ實現スヘキ各種方法中ノ一例トシテ爲サレタルモノナルコトハ報告書モ之ヲ明カニシ居リ、委員會自身モ右提議カ臨時ノ試案ニ過キサルコトヲ認メ左記ノ如ク附加シ居レリ。

假令日本ノ「満洲國」ニ對スル正式承認カ「ジュネーヴ」ニ於ケル本報告書ノ審議以前ニ行ハルコトアリトスルモ（右ハ吾人ノ無視シ得サル事態ナルカ）吾人ハ吾人ノ事業カ徒勞ニ歸スヘシトハ思惟セス。吾人ハ孰レニセヨ理事會ハ本報告書カ満洲ニ於ケル關係兩大國ノ死活的利益ヲ満足セシムルノ目的ヲ以テスル理事會ノ決議又ハ右兩大國ニ對スル勸告ニ有用ナルヘキ諸提議ヲ包含スルコトヲ見出スヘシト信ス（一三二頁）。

換言セハ、委員會ハ日本ノ満洲國承認ノ場合ニ於テモ是等提議ニ幾分ノ價值ヲ存スヘシトノ曖昧ナル語法ヲ用フルコトニ依リ、右承認ノ場合該提議ノ價值ハ多少疑シキモノトナルヘキコトヲ認メタル次第ナリ。從テ右ニ關シ詳細ナル論議ニ入ルハ其ノ必要ナキモノノ如クナルモ、事ノ真相ヲ更ニ明瞭ナラシメムカ爲二三ノ要點ニ關シ左ニ簡單ナル意見ヲ附加スヘシ。

(イ) 後述ノ如ク第九章中ノ原則第十八支那本部ノ國際管理ニ終ルノ虞アリ。第十章中ノ諸提議ハ右ニ比シ更ニ重要ナルモノナルカ、該提議モ亦之ヲ實施スルニ於テハ満洲ノ假裝的國際管

理ニ等シク右ハ満洲國ノ容認セサルヘキハ勿論日本ノ立場ヨリスルモ受諾スルヲ得ス。

(ロ) 又是等提議ハ餘リニ精緻煩雜ニ過クルノ嫌アリ。蓋シ之ヲ歐米諸國ニ適用スルニ於テハ不可ナカラムモ極東ノ現狀ニハ適セス。委員會ノ提出セル如キ案ハ紛爭當事國カ共ニ鞏固且信賴シ得ヘキ中央政府ヲ有スルコトヲ最少限度ノ前提要件トス。満洲問題ノ如キ前例無キ複雜性ヲ有スル問題ニシテ、而モ當事國ノ一方カ鞏固且信賴シ得ヘキ中央政府ヲ有セサル場合、斯ル案ヲ適用セントスルカ如キハ徒ニ事態ノ紛糾ヲ増スニ過キサルモノナリ。

(ハ) 日本政府ハ満洲ノ軍備ヲ撤廃シ、特別ノ國際憲兵隊ノミニ依リ同地方ノ平和ト秩序トヲ維持セントスルカ如キ案ハ現實ノ事態ニ全然適合セサルモノト認メサルヲ得ス。歐洲ニ於テサヘスル制度ニ依リ満洲ニ比スヘキ廣大ナル地域ニ瓦リ平和ト秩序トヲ充分ニ維持シ得ヘキヤハ疑問ナリ。斯ノ如キハ毫モ満洲住民ノ希望ニ副フ所以ニ非サルト共ニ、日本ノ極力防止セムトスル該地方ノ不安ト混亂トヲ釀成スルノ虞アリ、日本政府トシテハ重大ナル危惧ノ念ヲ抱カサルヲ得ス。要スルニ右ハ委員會自ラ排セル原狀恢復ニ比シ事態ヲ悪化スルコト更ニ大ナルモノアリ到底不満足ナルヲ免レス。

具體的提議ニ對スル批判ハ以上ニ止メ、更ニ稍々抽象的事項即チ右提議ノ基礎タルヘキ紛争解決ニ關スル諸原則ニ論及スヘシ。委員會ハ第九章中ニ「如何ナル満足ナル解決方法ト雖準據スヘキ一般的原則」ヲ明カニスルニ努メ居レル處、第十章ノ解決案ハ思フニ之ニ準據シテ作製セラレタルモノト認メラル。而シテ是等原則中日本政府ニ於テ格別ノ反對ナキモノハ既ニ日滿議定書ニ於テ

滿洲國ニ
對滿洲情事無キ態
同國ニ依リ安
定滿洲ノ安
亂セ
ラル

二三之カ適用ヲ見タリ。支那問題ニ對シ如何ナル見地ニ立ツモ同國ニ於テ無政府狀態ノ存續スル限リ、第一乃至第九ノ原則殊ニ第四乃至第九ニ基キ問題ノ満足ナル解決ニ到達スルコトノ不可能ナルハ明カナルヘシ。蓋シ右九原則ハ原則第十ノ示スカ如ク「支那ニ於テ鞏固ナル中央政府ナクシテハ」實際ニ適用スルコト能ハサルモノナリ。支那ニ於テ鞏固ナル中央政府ヲ招來センカ爲同國ノ内部的改造ニ對スル國際協力ノ望マシキコト勿論ナルモ、此ノ目的ヲ以テスル國際協力ハ（技術的援助ハ別トシ）支那ノ國際管理ノ形式ニ墮スルニ非スムハ之ヲ成就スルコト極メテ困難ニシテ殆ント其ノ望ナキニ近シ。假ニ百歩ヲ譲リ右ノ如キ國際協力カ可能ナリトスルモ之ニ依リテ直ニ鞏固ナル中央政府ノ實現ヲ見ルヘキヤハ頗ル覺束ナシ。日本ハ滿洲問題解決ノ爲ニハ斯ノ如キ事態ノ出現ニ萬一ノ望ヲ囁シ携手シテ時日ヲ空過スルヲ得ス。

以上縷述シ來レルカ如クナルヲ以テ、苟モ現ニ恢復ノ途ニ在ル平和ト秩序トヲ破壞スルノ虞アルモノハ如何ナル案ト雖モ新ナル紛争ト困難トヲ招來スヘキヤ必セリ。果シテ然ラハ切メテ滿洲ノ事態ノ安定ニ努ムルコトコソ真ノ經綸ニ非スヤ。又過去二十年ノ永キニ瓦リ支那ノ再興ニ關シ多大ノ忍耐ト同情トヲ表示セル世界ハ、宜シク滿洲新國家ニ對シテモ今少シク理解ト希望トヲ以テ之ヲ迎フヘキニ非スヤ。滿洲問題ニシテ一度解決ヲ見ムカ支那問題自體ノ解決ハ著シク單純化セラルヘシ。滿洲ニ於ケル平和及善政ノ現出カ支那ニ對シ好箇ノ指針ヲ示シ、同國ノ態度ニ好影響ヲ與ヘ、其ノ内外政策ヲ穩健化シ、其ノ結果支那國民ニ幸福ヲ齎スハ固ヨリ列國モ亦之カ惠福ヲ頤ツヘキコト疑フ容レサル所ナリ。